

---

# **超劇場版ケロロ軍曹 魔女と戦場の赤い悪魔との約束**

慧螺

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超劇場版ケロロ軍曹 魔女と戦場の赤い悪魔との約束

### 【Zコード】

Z4685V

### 【作者名】

慧螺

### 【あらすじ】

反ケロン軍の反乱から一ヶ月・・・一本の電話が日向家に鳴った。  
それが今回の事件の合図だとはまだ、皆思っていなかつた・・・

本（書類）

ギヨロロ総理大臣前施です

## 予告

遠い・・遠い昔の約束にして、それは叶えられなかつた約束の続き・

悲しくて、それでも魔女は願つた一緒にいたいと。赤い悪魔はその約束を果たしに彼女の元へ

しかし、それは悲しい物語の序章。

レイド人

人造人間の姉弟。

護りたい者達がいるから、赤い悪魔はそこから離れた、そして、同時に約束が果たされようとされる時でもあつた。

「ギーくん・・・ボクはボクじやないんだよ・・?」

魔女の兄の願望も同時に進行するとは知らずに・・  
劇場版ケロロ軍曹 反ケロン軍来襲!～今明かされる闇の歴史～から一ヶ月後の事件をつづる!

「それはマジジの願いではない。マジジの願いを捻じ曲げた貴様の  
望みだ!」

第一弾! 超劇場版ケロロ軍曹 魔女と戦場の赤い悪魔との約束!  
公開!

## 予告（後書き）

ついに公開することに決まりました・駄作ですがよろしければ見てください；

## キャラクター紹介（前書き）

題名どおりキャラ紹介です

## キャラクター紹介

登場人物はおなじみ原作からはケロロ小隊・日向家住人・ガルル小隊が出場。

オリケロでは前作敵として登場した反ケロン軍幹部が登場します。

オリケロなどが嫌いな人は回れ右！です！

1、ケルル統帥 口が悪いが指揮力は隊長の素質並の実力を發揮する。実はケロロのクローン

2、ロギギ 幹部の中でもケルルの右腕。ムードメーカーでよくケルルに苛められてる。ギロロとガルルの混ざったクローン

3、タナナ 同じく幹部の一人。垂れ目なのがチャームポイント。タママのクローン

4、ルクク 同じく幹部の一人。グルグル眼鏡、「ケケケツ」という笑い方が特徴。クルルのクローン

5、ゾルル兵長 幹部兼ガルル小隊暗殺兵。まあ詳しい経緯は小説にて。実はドロロのクローン

今回登場する新たな脅威＆勢力

1、マジョジヨ ギロロとガルルの従妹。今回では重要な鍵を握っている

2、ハギギ レイド人。ギロロに手当てをされ・・・？

3、バイル ギロロを兄貴と慕う。ティオラに異常なる憎しみをもつ

4、カガガ 元ケロン軍でガルルの同期。今回のことでの暗躍する。

5、マジジ マジョジヨの兄。ある日を境に軍をやめ、行方不明になっていたが・・・？

1、ティオラ バイルを追いかけて日向家に来てしまった礼儀が正しい子。

## キャラクター紹介（後書き）

とつあえず、今のところこれぐらいです。反ケロン軍については前作を見てください^ ^ ;

消えた紅（前書き）

本編開始ですっ

## 消えた紅

平和な田向家に一本の電話が響いた。

K 6 6 視点

あの事件のから一ヶ月が経つた・・ギロ口が田を覚ましたつてことで反ケロン軍のケルル達は帰つて行つた。だが、時々来ており、名々楽しんでは帰るという生活がここ一ヶ月は続いた。

夏美殿は電話を取るとすぐに受話器を持って、ギロ口を呼んでと言つた。どうやらギロ口宛の電話らしい

「?なんだ?」

「あんたに電話よ。すつじい知り合いつぽいし

夏美殿から受話器を受け取つてしまふとギロ口は出掛ける準備をしていた

「ギロ口?」

「すまん、やつきの奴に会つてくれ」

「ん。行つてらっしゃいであります」

我輩が言つた途端、ギロ口は飛び立つた。だが、その電話がこれら起つた事件のスイッチだとは誰も知らなかつたし、我輩も知らなかつた・・・

K 6 6 視点終わり

ギロ口が帰つてきたのは翌日の朝だった。

「ギロ口ー・・誰に会つて來たんでありますか?」

「ん?ああ。マジヨジョつてお前らは知らんか?」

「マジヨジョ・・・・・・あー・・・確かに、ギロ口の従妹だつけ

?体が弱い子じゃなかつたつけ?一人でペコポンに・・?」

「あ・・いや・・・どうやら兄と一緒に來たといつていた

「ふうん」

今は日向姉弟も学校で居ないため、日向家にいるのは居候たちだけ。

「あ。そうだ、ケロロ、いきなり団子食べるか？マジョがお土産に持つてきてくれたんだ。タママたちも呼ぼうか」

「お、いいでありますな～じゃ、我輩タママとドロロを呼んでくるから、ギロロはクルルをお願いね～」

「ケロロが言つたほうが来るんじやないのか？」

「ギロロが確率は十分高い、十中八九来る」

鈍感なギロロはケロロの言葉の意味に気づかずにクルルを呼びに行つた。ケロロは残りの二人を通信で呼び出す。

十分後にはケロロ小隊がリビングに集まつていた。

「お茶入れてくるから先に食べてろう」

「ギロロー手伝おうか？」

「大丈夫だ」

言葉に甘え、ケロロ達は自分の分を取り懐かしい故郷の味をかみ締めながら食べていた

「ほら

「ども

「ありがとうございます」

「かたじけない」

「ども

機嫌がいい四人がお茶を飲むと・・

ゴト・・・ドサツ

四人が湯飲みを落とし、倒れた。ギロロは焦ることなく、四人の落とした湯飲みを拾い片付け始めた。ケロロの部屋に四人を寝かすと、ギロロはテントに戻りすぐに出で行つた。

反ケロン軍本部。ケルルは多忙で仮眠すらまともに取れない状態だった。もちろん幹部の口ギギたちも同義である。

「あ～・・・ねみい・・・・・」

「お兄様、がんばってください！」

眩いたケルルの横に居るのは銀髪の少女だった。彼女の名はアンゴル・サラ。ケルルの義妹でアンゴル・モアの異母姉である。

「ケルル？ いるか？」

「んあ？ ギロロ？」

「ギン兄・・どうしたの？」

そんな執務室に顔を出したのは反ケロン軍の幹部やケルルにとっては絶対的に護るべき者のギロロだった。

ケルルとロギギたちはケロロ小隊のクローンだった。実験途中で失敗し、違う人格が形成された。初めて外に出たときに会ったのがギロロだった。ギロロは自分達の光の存在であり、生きる気力になつていて。以前ケロン軍は禁止された兵器、『破壊プログラム』をギロロに埋め込んだ。ボロボロなのをケルルたちが見つけ、保護した。ギロロは記憶喪失になり、反ケロン軍にギンロとして所属したこともある。サラがギン兄と言つたのはその余韻だ。

「これ、マジヨジョからもらつたんだ」

ギロロはいきなり団子を見せながら一人に渡す。

「へえ・・懐かしいじゃねえか」

「これがお兄様の故郷のいきなり団子・・」

サラは何か、感激している。一人して同時にいきなり団子を食べた。サラが倒れかけ、ギロロが支える。

「(やはり・・疲れていたのか・・あつさり寝たな・・)」

サラとケルルをソファに寝かせて、毛布を掛けてやる。

「・・・すまん。」

出る時に眩き、執務室を出た。一階まで戻り、ギロロが出ようと黙つていると口ギギがいた。

「あ、隊長」

「任務帰りか？」

「ああ・・今回ばかりは死ぬかと思つたぜ、だつてさーゾルルの奴俺にまで零次元やりかけたんだぜつ！」

「ハハツそして、文句を言つたら避けられないお前が悪い。とでも言われたか？」

「・・・そーなんだよ・・で、隊長はどうかしたの？大将なら上だけど・・その様子だと用事終わつたぽいよな・・」

「まあな・・あ、ロギギ。明後日ぐらいにでもこれをケロロに渡してくれないか？」

「へ・・?手紙・・?」

ギロロがロギギに渡したのは折りたたまれた手紙だった  
「なんで・・?自分で渡せばいいじゃん。一緒に住んでるんだしさ・・」

・

「ちょっと・・な」

「・・・。まあいいけどさ」

ロギギは手紙を受け取り仕舞う。

「あれ？もう隊長行くの？」

「ああ・・じやな」

「・・・。隊長。またな」

ロギギがそうこうつと、ギロロは何故か瞠目した。だが、一瞬で無表情に戻しその場を去る

「・・・。なんか変だつたな隊長・・俺もなんでまたなつて言つたんだろ？いつでも会えるのに・・・」

ロギギは自分が無意識に言つた言葉に疑問を持つが、気にせずケルルに報告するために執務室に向かつた。

「うわつ・・めつずらしー大将とサラが寝てるなんて・・・まあここ最近、不眠続きだつたし、隊長が言つたのか？だつたら・・起こさない方がいい、よな・・?」

執務室ではソファでケルルのサラが寝ていた。  
一時間すると、起きた。

「あ、大将、サラ。おはよーどう? 気分」

「・・・・」

「お兄様・・・もしかして・・」

「おい、ロギギ」

「へつ？大将なんでそんなに怒つてんの？」

ケルルの低い声で若干驚きながら用件を聞く。

「ギロロは・・どこ行つた？」

「隊長？隊長なら一時間前ぐらいにさつ、出て行つたけど、それがどうかした？」

「あいつ・・一服盛りやがつた・・。」丁寧にソファまで運んでくれて・・！#

ケルルは毛布を剥がすと、怒りながら、言つ。

「盛る・・？まさか・・！隊長が大将に？そんなことして何の利益になるんだよ？」

「んなの俺が知りてえぐれえだつ！ロギギ、アイツからなんか、預かつてねえか！？」

「（隊長・・なんで、盛つたんだ・；大将がすつゝ怖い・・）え・・と、ケロロ宛の手紙一通テス・・。」

「手紙い？」

「ハイ。隊長から・・。」

「渡された時なんて？」

「明後日ぐらいにケロロに渡してくれつて」

「んなの自分で渡せば・・。」

「俺もそう思つたけど・・。」

「けど？なんだ？」

「よくわかんねえけど・・。」

ロギギは言葉を詰まらせる。ロギギ自身もわからないのだ。『なんとなぐ』である。

「・・・田向家に向かうぞ、ゾルル以外の幹部を招集しろ」「了解」

その三十分後、ケルル達は田向家に向かっていた。

冬樹たちはリビングでおしゃべりをしていた。ケロロ達は部屋に

行つたら寝ていたので気にしなかつた。すると、ベランダが空いた

「冬樹！ケロロはどこだ！？」

「ケルル！？軍曹なら、部屋だけど・・・」

「サンキュー！」

ケルルが顔出したかと思うと、ケルル達は一斉にケロロの部屋に向かっていく。

「何・・・？いつたい・・？」

「そういえば、軍曹の部屋に伍長いなかつたね・・・」

「そうね・・・どつかに行つてんじやない？」

バタンと、大きな音を立てたにも関わらず、ケロロ小隊（ギロロ除）は毛布にくるまつてスヤスヤと寝ていた。

「・・・。おい！ケロロ！起きろ！寝てる場合じやねえぞー。おいゴラア！#テメ#も一服盛られてるじゃねえかー！#

「お兄様・・・とりあえず、落ち着いて！」

余程ギロロに盛られたのが悔しいのかケロロの完璧ハツ当たりである。

「おーい・・頼むから起きろ！大将がマジで怖いのー・マジでー！」

「で、あれ・・どうしたんですかあ～？」

「ああ・・隊長に一服盛られたんだ・・気づかなかつたからセ・・・大将の怒りが凄まじい訳・・怖えーのなんの・・・」

タナナたちは何も聞かされずに連れてこられたのでケルルのお怒り理由を知らなかつたのだ、ロギギが語つていてるとき涙眼である。

「ちつそつちは！？」

「全然起きる気配なしですよお～」

「すっげー幸せそうな顔（笑）キキキッ」

「ちつ」

ケルルは再度舌打ちをすると、バズーカを転送した。

「え？大将！？」

その行動をみてロギギたちは外に出る。長い付き合いだからこそ

ケルルが何をするかは一目瞭然だつた。

次の瞬間、ケロロの部屋からドカンと音がし、火薬の匂いが充満した。

「おーい・・生きてるかー?・」

「な・・なんでありますか・・いつたい」

「さつさと起きろ! ほら、起床!」

ケロロの抗議も最早無視して、ケルルは四人を起こす。手加減したのかケロロ達はアフロにはなつていない。

「いつたい、なんでありますか! ? まったく、いきなりバズーカで起こされるとは思つていなかつたでありますよ・」

「・・・あれ? 軍曹さん・・僕達リビングに居ませんでしたか?」

「いきなり団子を食べて・・」

「ギロロくんから出されたお茶を飲んだら眠くなつて・・・」

「テメエらも盛られてんだよっ!」

『何い! ? ・』

「とりあえず、大将もお前らも落ち着けよ、本氣で・」

怒りと混乱となつてゐる状態でロギギが一言呟いた。

とりあえず、少し落ち着きを取り戻したケロロ達はケルルの話を聞いていた

「じゃギロロは我輩達に新しい睡眠薬を飲まして、ケルルのところに行つて、ケルルに一服を盛つて・・消えた?」

「だな。認めたくはねえがギロロは今回ばかりは自分の意思で消えたつてことだ。」

ケルルが言つた言葉でケロロ達は肝が冷えた。以前ではケロン軍の呼び出しのせいだ。だが、ギロロが見つかつた時には自分達には武器を向けていた。

「何を思つて・・ギロロが離れたかわからねえが氣を引き締めた方がいいだろう」

ケルルが言い放つた言葉がケロロの部屋で響いてゐる頃・・・

「本当に・・・これでケロロ達には手を出さないといつんだな」

「勿論 僕がギーくんとの約束を違える訳ないでしょ？」

そこには、ギロロの田の前には帽子を田深く被つて、田が見えないケロン人がいた。

「無論、ケロン星、ケロン軍、ペコポン、反ケロン軍も」

「だから、出さないって、兄さんは出す気はないって言つてるし、そんなんことになつたらギーくんは裏切つていよいよ」

「裏切るつもりはないさ」

ケロン人の台詞にギロロが言い放つ。その言葉にケロン人は瞠目する。

「何言つて・・・」

「昔約束したる・・・何かあれば助けると。その約束が今なのであれば貴様との約束も守れるし、ケロロたちも護れる一石二鳥ではないか？」

「ギーくん・・・それおかしくない？・ボクはギーくんが護りたい人達のいわば敵であつて、約束ではどうにもならないんだよ？いいの？」

「構わんさ」

「ボク、そういうギーくん好きだよ」

ケロン人が言い放つた言葉は小さかつたのかギロロには届いていなかつた。

「ん？ 何か言つたか？」

「なんでもないよ。じゃ・・ようじや。ギーくん、ボク達の世界へ

消えた紅（後書き）

あ～緊張するよー

## 約束の記憶（前書き）

前回と同じ私は題名に添つた内容をやりますので、短かつたり、異様に長かつたりするときがあります。

## 約束の記憶

ギロロが消息を絶つて翌日、ケロロの部屋で会議が行われていた。  
「しかし・・・ギロロはなんでも、そんな行為をしてかしたかで  
あります・・」

ケロロの言葉に一同沈黙ができたがケルルがふと口を開く。

「そういやあ・・・あのいきなり団子どうしたんだ?」

「あ?あー・・あれねえマジヨジョって知ってる?ギロロの従妹の  
わ。そいつが来てお土産に貰つたらしによ」

「マジヨジョに?」

ケロロの言葉に反応したのはロギギだ。彼はガルルとギロロのク  
ローンで一人の記憶を持つている。だが、所々しかないらしく、他  
四人とは違い、完全ではないらしい。

「あ、ロギギ、知ってる?」

「一応・・西方の記憶にいるけど、あいつって体弱かつたんじゃな  
かつた?」

ケロロの言葉で記憶を引きずり出しているのか、ロギギの眉間に  
皺ができる。

「あいつが来れるとは思わないけど・・」

「兄君と来たつて言つていたであります」

「・・・そのマジヨジョが怪しくねえか?」

「奇遇でありますな、我輩もそう思つていたところであります・・・

偶然にしてはできすぎているでありますが・・」

「だが、団子の方には何もされていなかつたつてことはお茶の方に  
睡眠薬を仕込まれたと見て間違いなさそうだなあ」

隊長格の考えにクルルが補足のように付け足す。

「しかし、拙者がきかない新薬でござるか、そのようなモノが作れ  
る者・・」

「で、でも、マジョジヨが怪しつてだけでまだアイツが犯人って決まつたわけじゃねえだろ?」

ケルルたちの意見でロギギが言ひ。その言葉聞いてケルルたちも、早計だと思った。

「まあ、じけんじけんを考えるのは後だ。とりあえず、ギロロを探そう」「突撃兵組、参謀組、んでロギギとドロロと別れて探索あります。参謀組はここの通信を待つていてほしいであります」

『了解』

ケルルとケロロの掛け声で解散したケロロ小隊とケルル小隊であった。

ロギギとドロロは奥東京市の南にいた。

「隊長・・いねえな・・もしかしたら、もうこの町にはいないかもなあ・・」

「不吉なことを申されるな・・と言いたいでござるが・・・これだけ探してもギロロくんの影も形もないからね・・」

「タナナたちからも連絡ねえしな・・しかし、マジョジヨ、ねえ・・・」

・

「どうなされた?」

突然、マジョジヨのことを言ひ出したロギギにドロロは質問する。彼がこの探索をしてから明らかに何かを齒んでいた様子だったのだ、だが、悩むというより思い出すといった方が的確な表情をしているロギギをドロロは邪魔をしなかつた。

「せつしきからせ・・何か・・重要なことを忘れているようなそんな感じがするんだよなあ・・・なんだら?・・」

「重要なこと?」

「おう。なーんか、忘れてる気がするし、忘れちやいけねえって・・・そんな感じがするし・・訳わかんねえ・」

「ずっと、お主が悩んでいたのはそれが原因で? ジヤるか・・・」

「まあな

何かを忘れているというロギギに対し、ドロロはギロロがガルルの記憶だと踏んでいた。ケルルに聞いた話だが、前述したとおりロギギは完全に記憶がないといわれているが記憶の容量が多くすぎるために封印されている。だが、何かの拍子に思い出すこともあるそうだ

「まあ・・・その通り、田舎者

「かもな。こんなとこでウジウジしたって何も始まらねえしな」

- ፳፻፲፭

一人が休憩を終え、探索に戻ろうとした時だつた……

卷之三

卷二十一

急にロギギが頭を抑えたのだ。心配になり少し行きかけたドロロはロギギの元まで戻ってきた。

「大丈夫……少し、頭痛がしただけだからさ……いつ……！」

「一、二、三、四、五」

六四

いわみつちのまほら

口川圖集

頭を抑えて、アラインメントの上で蹲る日向。日向は立団の声が微かに聞こえた後誰かの声に導かれるように意識を失った。ドロロは意識を失った口ギギを抱え、日向家に戻った。

『ここどこだ？俺・・確か、氣絶したんじやなかつたけ？・すつげ  
一頭痛して・・』

今口ヰヰかしるのにが  
口ヰヰに氣絶する前の記憶を辿っていた  
色の世界だった。

፩፻፲፭

口ギギが思案に暮れていると・・

『アラビア語

۷۸

すると、ロギギの脇を通りぬけた影がいた。

『なんで・・小さい頃の隊長がここに?』

それは幼い頃のギロロだった。後ろを振り返れば病室が広がっていた。ロギギの記憶にも残っているマジヨジョが入院していた病室だつた。

『え? え? どうなつてんの? これ・・・もしかして、大将達が視た、不思議夢か?』

ロギギは幼いギロロを追つて病室に入つていった。

そこにはギロロとマジヨジョがいた。

『ギーくん・・・もし、ボクが助けて、仲間になつてつて言つたらなつてくれる?』

『当たり前だ!』

『じゃ、約束だね』

『おう! 約束だ!』

ギロロとマジヨジョは指切りをしていた。

『さうか・・隊長はマジヨジョと約束していたんだ・・だから? 違う。隊長はそんな理由でケロロたちを裏切つたりはしない、何か弱みを・・?』

ロギギはぶつぶつと呟いている。ロギギは馬鹿そこに見えるがケルルがない場合は臨時指揮官をやることもある。実質反ケロン軍の統帥ケルルの右腕としているのだ。それなり頭は回る。

『隊長がな・・』

ロギギが納得しなさそうに考えていると、遠くから声がした。

『なんだろ・・? 誰かに呼ばれている?』

ロギギはそんな感じがして、声がする方に向かつた。

そこにはギロロに似た奴がたたずんでいた

『あ・・・宿主もばつかだな・・ん? 誰? お前、こには宿主の場所だぜ?』

『へ? あ・・悪い・・なんか気づいたらここにいたんだ』

『ふう・・・じゃ、帰れ』

彼はそういうとロギギをけり落とした。

『！？えええ！？』

ロギギは抵抗もできずに真っ逆様に落ちて行った。

## 約束の記憶（後書き）

ケル：はいはい、ここで業務連絡です

ロギ：前作・今作についての質問コーナーを設けたいと思います

ギロ：なんでも聞いてくれ、すべて答えよう

ケロ：のことありますっ！別に作品についてじゃなくてもいい  
でありますよ？

四人：それでは質問待つてますっ！

新たな登場人物（前書き）

一話連続投稿です

## 新たな登場人物

「あんの・・馬鹿・・」

「まあまあ、今のところはどいつもこないって、クルルも言っているんです  
でありますし・・」

ロギギが寝ている医務室ではケルルやケロロがいた。ドロロが気絶したロギギを連れて帰ってきたのは、十分前。連絡を聞いて、ケルルは戻ってきたのだ。

「しつかし、なんで頭痛なんか急に・・・」

「もしかしたら、ギロロかガルルの記憶が蘇ったかだな。あいつの容量がでかすぎだしな」

ケルルの言葉でケロロは納得する。

「ん・・?」

そうしていると、ロギギが目を覚ました。

「ロギギ。大丈夫か?」

「大丈夫でありますかー?」

「・・・大将に・・ケロロ・・?あれ?ここどこ?」

最初はボンヤリしていたが、段々頭が覚醒していったのか、瞳に光が戻る。

「ここには医務室だ。お前頭いてえとか言つて倒れたつてドロロから聞いたぞ」

「あ〜・・まつたく、反論材料ないです。ドロロの言つとおり・すつげー頭・・痛くてさ・・割れそuddたの」

「今は?」

「今はどいつもない」

クルルの問いにあっさり答えるロギギ。氣絶する前の頭痛が嘘のようになくなっていた。

「で、今回は何を思い出したんだ?」

「ん～・・今回と直接関係があるかは知らないけど・・幼い隊長と、マジヨジョが。マジヨジョの病室で約束をしている、記憶。」  
ロギギはひどく落ち着いた様子で語った。

「約束う？」

「ギロロとマジヨジョが？なんの？」

「ん～・・どういった経緯でそんな約束したかはわからぬけどさ・・マジヨジョが仲間になつてつて言つたら約束してくれるとかそんな感じ・・・」

「成る程な・・・」

「それだけで我輩達に一々、一服盛つたんありますか？」

ロギギの言葉でケルルとケロロが咳く。だが、ケルルはロギギの表情に気づく

「まあ後でそれは考えるとして・・・なんだ、ロギギ。やけに納得してねえ顔じやねえか」

「へつ？ そうか？」

「ああ。まだ、なんかあんのか？」

「いや・・あると言えれば、その夢から抜け出す時に、隊長のそつくりさんに会つたことかな？」

そういうた、ロギギだが、やはり納得していない顔していた。

「ケロロ、ちょっと来い。クルル、後は頼んだぜ」

「ゲロ？」

「ん～」

ケルルはケロロの首つこを掴みロギギをクルルに任せて外に出た。

「どうしたんであります？」

「ロギギの奴、なんかまだ隠し事してやがるな・・・

「あ、やっぱり？」

「なんだ、わかつていたのかよ」

「だつて～ロギギの納得していない顔、ギロロにそ超そつくりなん

でありますよ」

「・・・なるほどな

「しつかし、何に納得できないの？」

「さあな。そこまでわかるか」

ケロロたちが上がったのは日向家リビング、そこには日向姉弟のどちらかが昼飯を調理中のはずだった。

ケロロ達がリビングのドアを開けると、知らない人間がいた。

「・・・。誰？」

流石といったところか、息はぴつたりだった。

「あ、軍曹とケルル。」

「あ、ボケガエルとケルルじゃない。」

日向姉弟が呆然している一人に気づき声をかける。

「夏美殿・・・つかぬことを聞くでありますが、あの御仁はいつたい誰・・・？」

ケロロが顔面蒼白になりながら言つ。ケルルは呆れた表情になりながら、庭に視線を向け、あつた物に密かに驚き、見知らぬ人間に視線を向ける。

ケルルの視線を受けた者はこちらに微笑み返した。

「ああ、ティオラくん？ 庭にあるやつで乗ってきてガス欠でここに落ちてきたのよ」

「それでお腹が空いていたからご馳走したらお礼に皿洗いてくれるんだ」

二人が苦笑しながら言つた。要訳すればこういうことだ。

ケロロ達がいない間にガス欠でここに不時着したティオラとやらは腹を空かしていて夏美たちがご馳走したら、お礼に皿洗いをしてくれた。

「つで、いいのか？」

「うん。」

「だから、そう言つてはいるじゃないの」

「ゲロロ！」

ケルルの要訳でソファで集合しているのはそこにいたメンバーだ。

「で、ティオラ殿はなんで、また、あれで旅を？」

「旅つて決まつてゐるわけぢや・・・」

「いえ、旅をしています。兄弟を探しているんです」

ケロロの言葉で冬樹が言おうとする、ティオラはケロロの言葉を肯定した。

「兄弟？ ティオラくん、兄弟なんて、居るの？」

「はい。兄が一人います。でも、僕が彼のどこに行くたびに彼はいなくなります・・・」

「それって、嫌われてんの？」

「ケルル！」

ティオラの言葉にケルルが発言する。夏美はケルルを咎めるように名を呼ぶ

「い、いえ！ 夏美さん、おそらく合つてます。以前彼にはつきり言われました・・『もう、近くに来んな。テメエが来ると俺の居場所がなくなる』って言されました・・・」

「何よ・・それ、酷い・・・」

夏美の眩きにティオラは苦笑でしか返せなかつた。

とある訓練施設。そこで周りに獣に囮まれた長髪の少年がいた。少年の腕は変で大きく突起物を有していた。少年はそれを操り、周りに居る獣を切り裂いていった。

『合格だ、バイル。君を組織の一員として認めよう』

「・・・ども・・・」

謎の声に感情もなく眩いで、少年 バイルは去る。

## 忠誠と大元帥の利用（前書き）

大元帥・・・じめんよ・・・

## 忠誠と大元帥の利用

「で、ここが食堂！」

「広いなこには・・・なあ、マジヨジョ。今運ばれているのは？」  
マジヨジョがギロロの言葉でそつちに視線を向けると、ボロボロで顔右がほぼ火傷の傷跡を残し、両腕に鎖を巻いているケロン人が運ばれていた。

「ああ・・レイド人のハギくん？」

「レイド人？あの？」

「うん。」

レイド人とは、昔ケロン星にいた忠誠心が驚異的に持っているケロン人がいた。そのケロン人の一族は他の空き星に移住しレイド人として独自の文化が誕生した。レイド人は忠誠を誓った相手を主とし、その主のためにならなんでもする。忠実な奴隸ということだ。  
「ハギくんね、一応この組織には属しているんだけど、主がまだいないから単独行為が多くて、人間関係も悪くはないけど上司とトラブルになることが多いんだよねえ～」

「知り合いなのか？」

「まあね。悪友っていうのかな？犬猿？性格があわないからよく喧嘩する」

「・・・後で話してみるか・・」

「どうぞ」

とりあえず、昼ごはんを食べるためには食堂に向かった。

マジヨジョが呼び出され、一人なつたギロロはハギギの下に向かっていた。彼と話をするためにだ。

探していると、案外早く見つかって、手当てされていない状態で発見された。

「おいつ！大丈夫か！？」

ギロロは急いで駆け寄るがかすかに息をしているだけのハギギを見て、肝が冷えすぐに医務室に向かつた。それで不幸なのが医者がその際丁度不在だったということだ。

「ちっ・・・！普通は誰かが交代にいるべきだろ？」「ギロロは怒りを露わにしながらハギギをベットに寝かせ、手当てを始める。

手当てを終わり、一息をつき、目覚めるまでこよつと判断したギロロは銃を転送させ、整備し始めた。

「ん・・？・・誰・・？」

しばらくしたらずぐに起きてきた。はつきりギロロに視線を向けている。

「おお、気が付いたか。俺の名はギロロ。貴様は？」

「・・ハギギ。なんで、俺医務室に？」

「傷だらけでソファに倒れていたお前を俺が見つけてつれてきた。これでいいか？」

「・・・・」

簡潔でわかりやすい説明だった。

「？大丈夫か？痛いところはないか？」

「あ、ああ。ない・・俺がレイド人だつて、知つていてやつたことか？」

「？何が？」

「この組織であまり俺を助けると他からも嫌われるぜ？」

「・・・それがどうした？貴様は貴様だろ？俺が関わるうと他の連中には関係ない」

ギロロはきつぱりとした表情で断言した。

「それに俺が仲良くしたいと思ったのだ、それでは理由にならんか？」

ギロロは本当のこと述べた。そうだ、元々自分はここの人間ではない。だが、仲良くしたい気持ちはある。

「・・・・」

「ん？ ハギギ・・？」

黙りこんだハギギを不思議に思ったギロロだが、次の瞬間驚くことになる。ハギギが跪いた。

「ハギギ！？」

「あなたに・・私のすべてを差し上げてもいいでしょうか？」

レイド人は忠誠に自分の命を差し出す。そういう意味でもこの言葉が使われる。

「・・・・俺、なんかでいいのか？」

「あなただから。俺は選ぶ」

ハギギは片目だが、ハツキリとした意思を持つていた。

「いいんじやない？ ギーくん」

「マジヨジョ・・・」

「・・・・」

医務室のドア影から出てきたのはマジヨジョ、ハギギは声がした方に視線を向けるがすぐに逸らしてしまつ。

「し、しかし・・俺はハギギが思つような人間ではないし・・・」「ギーくんまだ言つ？ ; ハギくんはギーくんの人柄を見抜いてこそ行動なの。それを無碍にするの？」

「う・・・」

「別に俺はどうちでもマスターのやりたいように」

マジヨジョやハギギの言葉で五分ぐらい時間が経つと、ギロロは一息吸い込む。

「わかった。ハギギ・・俺に着いてくれるか？」

「勿論。そのための俺の命

「だが、命は掛けるな」

「はい？」

ギロロの言葉で素つ頗狂な声をあげる。同じ心境なのか瞪田しているマジヨジョ

「何事にも生きて帰つてこい。任務でも無茶はするな。いいか？」

「・・・・はい」

「後、敬語もなしだ。タメ語で構わない」

「あら？ 上下関係が厳しいギーくんが珍しいね」

「ケロロはともかく、俺はないから」

「・・・。そう(いつそ、見事といえる)」

ハツキリと告げたギロロに呆れた視線を送るがギロロは氣づいていない。ハギギも苦笑いだった。

「いいな？ハギギ」

「あ、ああ（やつぱ、変わってるな・・・）」

さらりと失礼なことを思いながら、ギロロと行動を共にするようになったハギギだった。

ティオラ、そしてハギギが忠誠を誓った日の夜。ティオラは兄弟が見つかるまで田向家にいることになった。ケロロたちも異論はなく、ギロロ探しに精を出していたが見つかるはずもなく、意氣消沈した感じで集合した。

「で、これからどうするかが問題であります。ギロロは奥東京市にいないことはもはや、明白でありますし・・・」

「で、ロギギ。起き上がつて平氣か？」

「ん？ 大丈夫だって、頭痛はあン時だけだつたし、今はどいつもねえつて」

「ならよし」

ロギギ自身不思議なぐらい昼とは違ひ元気なのを不可解に思つているが考へてもどうしようもない氣にしなかつた。

「約束・・ですか・・それがやつぱり、原因なんですかねえ～」

タナナと隣同士で座つているタママがふと呟いた。ロギギが見た夢はここにいる全員に伝えられてくる。

「そつとも限らないですよ～隊長がそんなことでケロロ小隊を裏切るとは思いませんしねえ～」

「タナナの言つとおりでありますなー・・・」

タママの言葉でタナナが言い、その言葉にケロロが同意する。

「まあ・・で? 口ギギ。テメヒはわつかから向を悩んでる?」

「へ? バレバレ?」

「当たり前だ。阿呆」

「ヒテヒ:」

ケロロはその漫才を見て

「(あそこだけ平和ー・・)」

と思っていた。

「んー・・・なんていうかわ・・『約束』のあれを思い出しても思いで出不思議に思ったことがあるんだけどさ・・それがどうしても思い出せないんだ。なんか、直感的には約束は果たせれないって言つてる気がする・・」

「なんだそれ」

「俺もわからないから思い出すとしているんだけどやー・・まつたく、記憶にねえの」

ロギギは苦笑するがそんな場合でもない。

「ケロロさん、すみません・・お茶と夜食を持ってきましたよー」

そんな中、ティオラが人数分の夜食を持ってきた。

「おお、ティオラ殿。感謝でありますー!」

「サンキュ」

それぞれが礼を言つて夜食を食べる。そんな風景をにこやかに見

ていたが、突然「あ」と言つた

「んあ? どうした?」

「いえ、ガルルって言つましたっけ? 先ほど電話があつて明日地球上に来られると言つてました」

と二コやかに爆弾発言をしたティオラだった。勿論、ケロロ達は慌てた。ギロロに恋愛感情を持つているのはケロロとクルルにドロロだ。ガルルは自他も認める重度のブラコンであり、その重度は時折垣間見る。そんな彼が今ここにギロロがいないとわかると暴走するに決まっている。前回の事件以降ブラコン度は輪に掛けて酷くなつたのだ。

「どうしょー！つてケルル、どこに連絡してんのさつ！」

「大元帥」

慌てるケロロに冷静に返すケルル。

「大元帥に？大将、連絡してもしょうがなくね？」

「アホ抜かせ。大元帥に頼んで、ガルルが来るのを阻止しても、もうなんだよ。大元帥の命令なら、ガルルも下手に来れねえだろ」

ニヤリと効果音が着きそうな感じでケルルは言い放つ。その言葉に成る程と反ケロン軍とは対象にケロロ小隊はいいのかと思つてしまふ。が緊急事態なので黙つておく。

「あ、でもゾルル兵長だけはこちらに欲しいありますなあ・・・」

「おう。それ俺も思つた・・・あ、大元帥？ケルルだ。とりあえず、ガルル小隊をこっちに寄越すな。任務でもなんでもいいから阻止しろ。ああ、でもゾルルはこっちに寄越せいいな？よし」

一気に用件だけを告げるとケルルは通信を切る。

「一方的でありますなー・・・」

「まあな。話を長引かせて、ギロロ不在という事実が知られたくないしさ」

「それについては同意見であります」

「（なんでだろう・・大将とケロロが黒いんだけど・・）なんでだろう・・・」

「何がです？」

「なんでもない；でもさあ、ガルルの協力はいるとは思うんだけど・・俺の記憶だけじゃ限界あるし、マジョジヨの兄貴ともアイツは接点あるから探ることもできるし」

「それはもうちょっと先であります。マジョジヨが、ギロロをそう仕組んだかはまだ、ハッキリしていない訳だし、犯人にするのはまだ早いであります・・・」

ロギギの提案も考えていない訳ではない。だが、それを実行するためには証拠がいるし、ケロン軍を誤魔化すための材料もないのだ。そんな時期にペコポンにこれば知っている大元帥以外の上層部が怪

しむ。

「流石軍曹さんですか！」

「大将も流石ですねえ～」

突撃兵組がケロロ達を褒めているがロギギはある点に気がつく。

「なあ大将・・」

「あ？」

「大元帥に連絡は取れるんだよな？…さつきみたいにわ」

「ああ」

「だつたら、ガルル小隊をこっちに寄越すときに大元帥に連絡して大元帥の命令でペコポンに向かうつてことにてしまえば、他の上層連中は黙るんじやねえか？・」

ロギギの提案は一気にその場の空気を凍らせた。

「「それだつ！」」

「頼むから早く帰つてきてくれ、隊長・・」

ロギギが涙目になりながらツッコミを入れる。

## 不思議夢

その頃のギロ口

「ギロつくしゅん！」

「マスター？」

「ギーくん、風邪？」

「いや・・・くしゃみと同時にロギギに呼ばれた感じがしたが・・・

氣のせいか・・・」

「氣のせいじやないよ！氣づけ！」

「誰だ？ロギギって」

「ギーくんの反ケロン軍での部下」

「違うからなつ」

「え？違った？」

部下だったのは記憶がない時で、元々はケルルの部下なので訂正しておく律儀なギロ口だった。

三人は夕食を食べに食堂に向かつていた。深夜十一時、普段なら寝ていてる時間が訓練や色々で食事ができていなかつたのだ。食堂についた三人は他に誰かいることに気づいた

「あれ？あの子・・・今日、試験で一発合格した・・・バイルって言つたけ？」

「あの試験をなー・・・」

「ハギギは？」

「勿論一発合格」

ギロ口の問いに即答するハギギ。ちなみに試験とは魔獣を幻覚で作り出し、それを時間制限の中すべて、倒せたら合格である。だが、レベルが高く、そう簡単には合格にはならないのが現状だ。

「何してるんだろう・・・部屋は与えられてるはずなんだけどなあー

ボクたちみたいに夕食食べ損ねたとか？」

マジョジョの言葉で苦笑しかなかつた残りの一人だつた。ギロロがバイルの近くに行つて、表情を伺うと

「・・・ハギギ・マジョジョ、夕飯食べるぞ。静かにな

「?どうしたんだ?」

「何々?」

ギロロは一人の下に戻り、一人とバイルと一緒に離れた席に座り、注文をする。

「寝てた・・・」

「あの体制ですか?」

「ああ;爆睡だつたな;」

ちなみにハギギの言つたあの体制とは椅子に座つた状態で猫背になつており、首を下に向けて、寝ている。器用だと三人は思つた。

「どうする?起こすか?」

「いや、後で運ぼう。マジョジョ」

「はいはい、擬人化魔法ね。食べ終わつたらね」

言葉通り、ギロロたちは食事を終わらせ、擬人化魔術によりギロロを人型にし、ギロロはバイルをそろつと運んだ。

「ここか・・・なんで、部屋で寝ないんだろうか?;」

不思議に思つたがそれもしょうがないので布団をかけ、戻ろうとしたが・・

「・・居場所・・奪わないで・・・」

半目で意思がモヤモヤとしているが、はつきりと涙を流しながら

言い放つ

「・・・大丈夫だ・・誰も奪わない」

「・・・・・誰だ・・・?俺・・食堂で寝てたはず・・」

覚醒したのか色々混乱している様子だつた

「食堂で寝ていたのを俺が運んだ。あのままで風邪引きそうだからな」

「・・そか・・ありがと・・」

「ああ。俺の名はギロロだ。貴様は?」

「バイル」

「バイル、か。これからようしく」

バイルから返事はなかつたが、ギロロはそのまま出て行く。

ギロロが行方不明になり、二日後。捜索は難航していた。ゾルルも合流し、それぞれ話し合つていたがやはり、ガルル小隊が必要だと考え、大元帥に頼み任務としてペコポンに来れるようにした。その夜

「それでは、ケロロ小隊とケルル統帥とアンゴル＝サラに一服盛り、行方を暗ました、と？」

「だから、さつきから言つてんだろうがつ！ 何回説明すれば気が済むんだつ！ #」

ガルル小隊が合流して一時間。ガルルがその現実を受け入れたくないあまりに説明だけに一時間費やしたのだ。

「認めたくねえのはわかるが、現実を見る。理解しろ。今度んな真似したらテメエは容赦なくナイトボールの餌食な・・・」

ケルルはかなり怒り狂いながら

「ガルル！ 頼むから、これ以上大将を怒らすような真似はすんな！ 頼むからああ！！」

「必死ッスね・・口ギギさん・」

「目が、本気つて語つてるわね・・・」

「どうしたの？アレ」

「ハつ当たり・・が・・口ギギに・・」

ゾルルの言葉にあとガルル小隊が視線を遠くやる。司令室に、布団を引いていく。

「なんか・・修学旅行を思い出しますな・」

「あはは・・こうした方が楽しいですし・」

ケロロの言葉で乾いたタママの言葉が響く。

起きても寝ても、話題は今回のことばかりでふいにケロロが呟いた

「は？なんつった？テメエ」

その弦きは隣にいた。ケルルにだけ聞こえていた。

「だから・・我輩達のこと嫌いになつたのかなー? って思つたんであります・・」

「どうしたんだよ? 隊長らしくねえ意見、じゃねえかあ? ケロロの言葉にクルルとその隣に寝転がっていたルククも賛同するが如く頷いている。

「一向に侵略が進まないこの部隊。普通なら脱退届けをいつ出されてもギロロの性格上あらざる事態もあるけど、ありえない光景があります・・」

『あ～・・・まあ・・』

「でしょ?」

ケロロの言葉でケロロ小隊とケルル達は同意の意を示す。堅物ギロロは真面目だ。だから、こういう事態には我慢ならないこともありますが、時折自分もその原因となつていて自覚することもある。だが、それを否定する人物が居た

「それ、違うんじゃね?」

ロギギである。一同の視線がロギギに集まる。

「だつて、隊長がそんな性格ならとつくて脱退届けを出してるつて。それにもしそうなら、盛らずに懲々裏切り者のレッテルを貼られるような行為をせずに異動届を出してるつて」

ロギギの言葉でそれもそうだと思いつて、明田さうじに会議をして、探そつとこいつことに

「・・・・あれ? ;俺、寝てたはず・・?」

ロギギがいるのは廃墟や瓦礫が沢山ある場所だった。

「あれれ? ;何で、んなところにいるんだ? 俺は司令室でみんなと寝てたはず・・;」

ロギギはとりあえず、歩くことにした。だが、歩いてどこを見ても終戦後のようにボロボロで建築物にいたっては見る影もない。

「なんで、こんなにボロボロな訳? まさか、過去の記憶でも見てん

の？それなら、隊長の方がいいなあ～でも、ガルルっぽいな・・この様子だとさ・」

自問自答をしていると、声がした。ロギギは声がする方に向かう。

そこにはギロロがいた。

「・・・隊長・・・？たい」

ロギギはギロロを呼ばうとしたが、ギロロが何かを言っていることに気づいた。耳をすませると

「俺が・・あやつらを護らないと、ダメだ。俺でいいのなら、何をしても構わない。だから、ケロロ達には手を出すな・・・！」

「え・・？・」

「頼むから・・ケロロ達には・・ケロロ小隊、ガルル小隊、日向家・・ケロン星にケロン軍、ペコポン・・反ケロン軍・・俺の命はどうなってもいいから、手を・・出すな・・・！」

「隊長・・・？何言って・・？これ夢？それとも隊長の不思議夢か？」

ギロロは手に持っていたナイフを首に当てる、しばりくすると、それに気づいたロギギが慌てる。

「隊長・・！それはまずいって！隊長！」

ロギギの叫びは聞こえないのか、ロギギが手を伸ばした瞬間、ギロロはナイフを引いた。

「隊長　！－」

寝静まった司令室にロギギの叫びが響いた。勿論隣で寝ていたケルルがすぐに起きる

「るつせえぞ・・ロギ」

不機嫌に呟くがロギギから返事がない。様子がおかしいと思い、ロギギを見ると、大量の汗をかきながら息苦しそうにしていた

「ロギギ！？おい、大丈夫か！」

ケルルの声で他の全員が覚醒する。

あの後、すぐに医務室に運ばれプルルが診た

「軽い呼吸困難だけど、今は落ち着いてるわ、悪夢でも見たのかしら・・？」

「あいつが起きた時、隊長って言っていたからギロロ関連の夢なんだろうな」

プルルの最後の言葉でケルルが自らの予測をたてる。今は落ち着いた表情で眠っているロギギ。何を見たのか、それはまだ聞けないのだ。

「あ、兄貴」

「だから・・違うと言っているだろ？・・」

バイルとギロロが廊下で会った。部屋に送り届け、一緒に行動していると、いつの間にかギロロのことを兄貴と呼び出した。ギロロは否定しているのだがそろそろ、否定するのも面倒なのでしなくなつてきた。

「そりそろ、寝ろよ？もつ、遅いからな」

「もう、寝るって。じゃお休み兄貴」

「ああ。おやすみ」

ギロロが注意すればバイルはあっさりと寝に行つた。  
ギロロはあの男に呼ばれているためそこに向かつた。

## 不思議夢（後書き）

小説書くのって・・すひじい疲れるんですね・・4／24からこれ  
を書いて・・今が3ヶ月1・2日ぐらいですかね？・それでは、ま  
た明日！

**黒猫（前書き）**

今日は短いですみませんつ  
⋮⋮

「ん・・・？たいしょー？」

「起きたか・・しつかりし。四律回つてねえぞ・」

ロギギが呼吸困難を起こし、ケルルが診ていること一時間で田を覚ました。

「で、気分はどうだ？」

「ん～・・頭が少し痛いぐらいで大したことじやないし・・・あ、治つた」

「酸欠だらうな。まだ、寝る。夜中の一時だぜ？今。朝になつたら事情聴取してやる」

「えー・・されるの？俺；っていうか俺、今回の事件で関連でこの不思議夢見る確率高いんだけどー・」

「不思議夢・・・か・・」

「そー」

不思議夢。前述からあつたが、反ケロン軍襲撃事件の際ケロロとケルルが破壊プログラムの存在を知ったのもその不思議夢のお陰だつた。滅多に見ないモノで全員その夢を不思議夢と呼んでいた

「捻りもなんもねえよな。名前」

「んー・・まあこういう事件で関わってるみたいだしさ・・・見ないにこしたことねえんじゃね？・」

ロギギは苦笑いしながら言つ。それもそうだと断言するケルルだつた。

翌日、ロギギはケロロたちに心配されながら起床した。朝食を食べ終わり、夢のことを話す

「ギロロ・・・が・・？我輩たちのために？」

今一現実がつかめず呆然とするケロロ達。

「でも、それが本当だとは限らない・・所詮は夢だからさ・・・」  
だが、いやに真実味があつた。そんなことは思いたくはない。だ  
つて、思つてしまつたら最後のような気がするのだから。

その後、ケロロたちは何かを探しているよつできょんきょんしな  
がら辺りを見渡していた。ケロロたち曰く黒猫に会いに行くらし  
い。

「ノラーノーラー」

「あ・・? ケロロ?」

猫系統の宇宙人との混血だらうか長い尻尾をぶら下げ煙草を吸い  
ながら、木の上にいた。ケロロたちより若くクルルと同い年ぐらい  
に見える。

「ギロロが・・」

「知つてるつて・・会いに着たぜ・・あいつ

「なんか・・言つてたでありますか?」

「べつに一何も。」

「そうでありますか・・・邪魔したであります・・」

ケロロたちが帰ろうとした。だが、ノラが突然、あ、と声を出した

「あ? どうした?」

「・・・ギロロがな・・」  
このから帰る時、俺にお前は死ぬなよつ  
つて帰つて行つた。ケロロ、おめえならこの意味わかるよな?

「・・・ありがとうございますっ」

「おい、ケロロ、どういうことだ?」

「ノラは極度の死にたがりであります。理由は知らないであります  
が、死にたがつてることはわかってる、だから、煙草を吸つてゐる  
であります。ギロロは会つたびに生きろつて言つんであります。死  
ぬなとは一度も言わなかつた・・・」

「ギロロがノラに伝えたかつたことがあつたつてことか・・・」

「・・・なあ・・・ギロロ。気づいてるか? テメヒの目・・死に行

くよつな目めえしてたんだぜ・・・  
煙草たばこを吸くいながら黒猫くろねこは咳せきいた・・・

## 悲しい日常とキルリーン

ケロロ達がロギギから話を聞いてる、同時刻ギロロは夢から目を覚ましていた。

「マスター、おはよ」

「・・・ああ」

「どうしたの？」

「いや・・・夢の中でロギギに呼ばれた気がしただけだ。気にするなギロロの周りにはハギギとマジヨジョがいた。

「つか・・・なんで、マジヨがいんだよ？」

「いいじyan 別に。ハギくんには関係ないでしょー」

「マジヨジョ・男の部屋に易々と入るな！」

ギロロが寝めるも聞いておらず、むしろ反論もした

「だって、ギーくんたちも気づかなかつたし、気持ちよさそうに寝てたからセーー」

親切でしょ？と付け加える

「どこが親切だ#どこぞのびっくり企画だよー#」

正確なハギギのツツ ノミが朝から入ったことは言つまでもなかつた。

ギロロはケロロ小隊から離れて、やはり、彼らを護るためにとは言え。悲しくもあった、今でもその気持ちは変わらないし戻りたいと思う。けど、ここでも仲間ができてしまった。後戻りはできない。それに自分はケロロたちから見れば裏切り者だ。仲間に睡眠薬を飲ませた。それでも護りたかったケロロ小隊や日向家が住んでいる地球を

「ギーくん? どうしたの? 元気ないよ?」

「いや、大丈夫だ」

「・・・そつか。朝飯食べよー途中でバイくん拾つてセーー」

マジヨジョはそういうと先に行ってしまった。ギロロたちも苦笑しながら続していく。あわよくばこんな日常が悲しくも毎日続くことを祈つて。

ケロロ小隊は以前冬樹とケロロが誤つて復活させてしまった、キルミランシステムの監視の任務も一応ある。それのせいか地球侵略が多少お咎めが減つてきたのだ。

「もー！こんな時に報告書を作らないといけないなんてー！」

ケロロは喚きながら、祠までケロロ小隊と共に歩を進めていた。

「しううがねえって。それに封印を解いたのは隊長だらう？」「うつ・・・・・」

ケロロは横槍により何も言えなくなつたケロロであつた。

ギロロ搜索に関してはケルル小隊に本日は一任してもらうことになつた。

「あ、あれですねーいつつ見てもボロッちですう」「

「祠を馬鹿にしたら罰が当たるでーござるよ」

タママが言った言葉をドロロが嗜めた。まあいい例があるのでタママはそれ以上何も言わなかつた。

ケロロ小隊一行が祠の付近に到着した。その時だつた。ケロン人と人間が出てきたのだ

「ゲロオ！？」

「・・・・！？ちつ！」

「隊長殿！あのケロン人の手元を！」

奇声を上げたケロロとケロン人が目が合い、ケロン人は舌打ちしながら反対側にある屋根に上つた。ドロロに言われてケロン人の手元を見ると・・

「あつちよつとーーそれ、返すでありますよー！」

そう、ケロン人の手元にはキルミランが封印されている壺があつた。あれを取られるわけにはいかない。

「それをこつちに渡すであります！」

「断る！バイル、行くぞ！」

「あ？殺さねえのか？見られたぞ」

「あの人の護りたい連中だ。傷つけるわけにはいかない」

「兄貴の？・・・ちつわかつた」

ケロロたちは二人の会話はわからなかつたがそれは後で聞くこととした。

「それは返してもらひでござれるよー。」

「返せ、ですう！」

「ハギ兄・・・襲つてきたぜ？」の場合は？」

「逃げるに決まつてんだろ・」

ドロロとタママが一人に掛かる。バイルという人間はハギ兄と呼ばれたケロン人に問い合わせられた。

「だが、アサシントップはキツい・・バイル、追い返すぐらいならいいだろ？」「ん」

バイルは短く答えてから、腕を静かに上げた。その瞬間、バイルの腕が音を立てて、巨大な銃へと変形した。

『！？』

それを見たケロロ小隊は驚く。バイルはその変形した腕をドロロ達の下にやり、発射した。

ドカン！

そんな音を立てて、煙が当たり一面に立ち込めた。

「ゲホッゲホッ・・なんも・・見えないあります・・！ゲホッ」

ケロロが咳き込んでいる間にハギギたちは去ろうとした。

「待つて。バイルくん」

「・・・テメエ・・」

目の前にはティオラがいた。手には買い物袋がぶら下がつていた。

「ティオラ・・殿・・」

ケロロが呟いた。バイルが瞠目している。

「バイル。知り合いか？」

「・・・まあな。なんで、テメエがここにいんだ・・・?あ?  
ハギギの問いに曖昧に答えてバイルはティオラを憎んだ敵のよう  
に睨み付ける。

「どうして・・・?テメエがいるんだ!-?ティオラ-!」

悲しき日常とキルミツノ（後書き）

ドロドロの兄弟…だつたりあるつ

## 兄弟（前書き）

今日はバイルとトヨオラのお話です！

## 兄弟

「バイルくん。ケロロさんたちの仕事の邪魔しちゃダメだよ。それが何なのか知らないけど・・取っちゃダメだよ」

「あ？ んなの知るか。テメエの指図なんか受けねえよ。ハギ兄、行こうぜ」

「・・だな」

バイルはティオラの言葉に耳を貸さずにハギギを誘つてその場から去つて行つた。

「バイルくん！」

ティオラの叫びは無常にもそこに響いていただけだつた。

バイルとハギギの襲撃された後ケロロ小隊は日向家に戻つていた。

「キルミランを奪つてどうするつもりだ？」

「さあ？ それは知らないであります。でも、きっといい意味ではないでありますよ」

ケルルたちに説明をし、彼らの目的を考えていぐ。ティオラは無言だった

「さて・・ティオラ殿、あの黒髪のバイルといつ少年とは知り合いでありますか？」

ケロロがティオラの方に向き聞いた。ティオラは声を掛けられた瞬間、震えて、目を泳がせたがそれもすぐに終わり、ケロロたちの方へ目線を投じた。

「はい・・ボクが探している・・兄弟です。名はバイル。僕より二年早く生まれました」

ティオラはそこから自分の過去を話し始めた

「僕達は人造人間と呼ばれるモノで・・ボクもバイルくんと同様腕が変形します・・ボク達の製作者は戦争に役立てようと思いボクたちを作り出しました。ですがバイルくんが完成し、いざという時はもう、戦争は終わっていました。博士は悲しみましたがバイルく

んはそれを理解し博士の傍にいるようになりました。博士は今度は人が幸せになるようなモノを製作しようと考えバイルくんを生み出してから、ボクを生み出しました。ですが、一年経つたある日博士はバイルくんを追い出しました。理由は知りません。・ボクはバイルくんと離れたくなかった。たつた一人の兄弟だから、探して見つけて一緒にそこにいました。でも、バイルくんはすぐに消えました。そして、ボクは探しました。・でも、すぐ消える。その繰り返し。ある日バイルくんは『もう、近くに来んな。テメエが来ると俺の居場所がなくなる』と言いました。それが日本に来る前の話です。すみません。・長く話しちゃって』

ティオラは一気に話した後謝罪した

「いやいや・・結構な経験で・・」

「人造人間ね・・・そら唯一の家族だな

「敵側になっていたら辛いですう・・・」

「心が痛む話しへござるな・・・」

「兄弟対決かあ・・・」

話を一気に聞いたケロロたちは思い思いの感想を言つていった。ケロロたちは納得した、だから、あんな憎の目でティオラを見ていたのか、それはまた居場所を奪われるかも知れないという恐怖と不安とそんなことを無意識にやつてているティオラに憎しみを抱いているのだ。

キルミランを奪い、戻ってきたバイルはすぐに自分の部屋に行つた。部屋に入つて鍵を即座に閉め、座り込む。

「（なんで・・・！なんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんでなんで・・・あいつがいんだよ！？あいつは置いてきたはずだ、また俺を追いかけてきたのか・・・！くそ・・また、俺の居場所を奪うのか！？あいつはいつもそうだった。博士も、全員そうだティオラをが入つてくると、俺は要らなし者にされる。先に生まれたのは俺なのに・・・！）くつそが、な

んでいる・・・！？・・・兄貴も俺を、捨てるのかな・・・？」

言い知れない不安がバイルの中に広がった瞬間だった。

その頃ハギギはある男の下へ向かっていた。

「おい、もつて来たぞ。キルミラン」

「そうか・・・すまないね」

「本当にテメエに協力すれば、マスターは解放するんだろうな？」

「勿論。ボクは約束を守る方だよ」

その答えに眉間に皺が寄つたハギギだが、踵を返しその部屋から誰かとすれ違いに出て行つた。

「おい・・あまり、苛めてやるなよ?つうか、テメエは一体何をしてんだ?」

「フフ・・・こればかりは副官の君にも教えられないよ・・・僕は完璧に蘇らせたいんだ、あんな不完全ではなくね・・・」

「・・・まだ、諦めいなかつたのか・・・」

「当然じゃないか!でも・・!もうすぐだ、もうすぐで不完全なあの子じやなくなる!」

「・・・(哀れな)」

ゴーグルをして、白衣を着ているケロン人は目の前の男を冷めた目で見ていた。自分は彼の副官。何も言つことはない。

# 加速する物語（前書き）

更新です　ｗｗ

## 加速する物語

ケロロたちはギロロ搜索と同時にキルミランシステムの行方を追つていた。だが、情報が少なすぎる、それに

「今回・・繋がってる氣いすんな・・」

「へ？ 今回つて・・ギロロの行方不明とキルミランの？」

ケロロがガンプラを作っている中、背中をケロロに預けていたケルルが無線を自分の掌で遊びながら言つた。

「そ。その二つ。ギロロは行方不明になつて四日目。ギロロは間違いないく、どつかの組織に属している。」

「その根拠は？」

「あいつが姿を消して、目撃者が一人もいねえっていうのは異常だ。あいつがどつかに属して、その組織がギロロを隠したつて言つのが今のところ、俺の見解だが・・どうだ？」

「確かに納得できると言えばそうでありますな・・でも、ケルル。そうなると矛盾が出てくるよ？」

「あ？」

「まず、もしどつかの組織に属すにしても我輩たちに睡眠薬を盛る必要は？」

「ねえな。ギロロなら脱退届けを出すはずだな」

「だよねーそれが矛盾ー。二つ目はただの感なんですが・・口ギギが見た、不思議夢の件。もしそれが本当なら何か色々ス黒いモノが裏に渦巻いているような・・」

「そして、もう一つ。テメエの聞いた話によると、ハギギとか言うケロン人・・いや、レイド人だな」

「レイド人？ 確か主人を誰か一人に定めて、その主人のためならなんでもする？ あの？」

「ああ。の方方が護りたい連中・・・の方つてギロロのことなんじゃねえのか？」

「確証は？」

「そんなことをする人物なんて一人しか思い浮かばないからだ」「なるほどね。」

ケロロはその言葉で納得できた。

「でも、納得はできるし、それでしつくづくるし……」

「ああ？ なんだ？ まだ、なんかアンのか？」

「ないでありますよ・・・じゃあさ、なんでキルミランを奪つていったんで？」

「それは利用するためだろ？」

「なんのために？ もし、ケルルの予測どおり、ギロロが我輩たちを護りたい者として、手を出すなと指示をしているのなら、キルミランを奪うことで意味がない。キルミランを発動すれば破滅に向かうだけでありますよ？ それなのに奪つって……」

「ギロロが指示を出していない。って考えるのが妥当だと俺は思う」「ギロロじゃない誰か？ でも、もし、あのレイド人がギロロのであるのなら、ギロロ以外の言つことなど聞かないはず……なるほどねえー・・・ 納得できたであります。」

「・・・俺とテメエ・・・ホントに思考回路が似てるな・・・」

「・・・で、ありますなー」

仮定でしかない思考。一人はある結論まで達していた。だが、所

詮は仮説に過ぎない。確証は今回はなかつた。

「そういうやあ・・・口ギギの奴、なにか隠しているよな・・・」

「ま、気長に待つしかないであります・・・ 気長にね・・・」

ギロロは黒い布に包まつっていた。田は堅く閉ざされており、意識

がないように見えた。その傍にはマジヨジョがいた。

「だから・・・言つたじゃないか・・ギーくん、逃げてもいいんだよ？ つて・・・君はこうなるつてわかつていただろ？ なんで、逃げなかつたの？ おかしいよ・・・ボクの約束とか・・ボクじゃない・・のに・・約束したのはボクじゃないんだよ？ 君も知つてるだろ？ オ

レは・・・

マジヨジョはそれ以上言わなかつた。否、言えなかつた。後ろにはハギギがいたからだ

「ハギくん・・盗み聞き?」

「茶化すな。テメ・・何者だ?俺がマスターから聞いた情報によれば、テメエとマスターは従妹だつてな」

「そうだよ。従妹だよ」

「約束を守るために、ここに来た」

「なんで、そこまで知つてるかなあ・・・それもギーくん情報?」

「まあな。だが、さつきからのテメエの言い方だとテメエはマジヨジョであつてマジヨジョじやない別の誰かつことになる。・・・か?」

ハギギの言葉にマジヨジョが黙る

「その顔・・・どうやら、図星のようだな

「あ〜・・もう、なんでギーくんにはバレてないのに、君にはバレてるかな・・・」

「さつきの一人称・・それが本来のテメエの性格か?」

「ん〜・・・どうだろ?ね。マジヨジョとしての記憶が最初から合つたから君の言つとおりボクはマジヨジョの  
だけど、そうじゃない。性格が違つた」

「性格?」

「一緒にだけど、兄さん曰く違うんだつて

「意味わかんねえ・・・」

マジヨジョはクスクス笑つてゐる。ハギギはレイド星に帰れば、両親、兄がいる。レイド人というのは奴隸という意味だ。兄も自分にも仕える相手は決まつていた。だが、ハギギは相手を見てもどうも心が動かなかつた。両親達の反対を押し切りここにきた。

「ねえ・・ハギくん」

「あ?」

「ハギくんはさ・・・ケロロくんたちを殺せつて言われたら殺す?」

「俺はマスターの命令以外は聞く気はねえよ、例え、マスターの命が掛かっていても、俺は連中の命を優先する」

「以外だな・・」

「・・・・。マスターがそんなことを望まないからな

「・・・・。あははっ！そつだねー君の言つとおりだよー」

その後、マジョジョは爆笑していた。ハギギにとっては何が面白かったのかはわからないが、まあいいかと思つている。

「俺は俺だよ？」

「は？・・・・マジョジョじゃ・・ない？」

「流石だな。正解だ。だが、誰かはまだ、内緒だからな

「なんだ・・それ・・」

ハギギがマジョジョの体を使つてゐる者が言つてゐる言葉の意味がわからない。その時。

「ヨオ・・いい話があるんだが・・乗らねえか？」

物語は加速する。

## 加速する物語（後書き）

ケル：前回（前作）に引き続くコーナーっぽいの行くぞ。まあたし  
ようこりもなく、小説が連載されたな

ケロ：それがこの管理人の醍醐味であります。優柔不断

ケル：それ・・テメエが言うか；

ケロ：しつかし・・ギロ口總受けっていうのに我輩との進展がない

つてどうよ？

ケル：知るかっ俺達はフラグすらねえぞ

二人：っていうわけで次、突撃兵組

**真実と魂（前書き）**

自分が書いている中での執筆は終りました。後は掲載するのみ！

キルミランが奪われて、三田経つた。つまり、ギロロがいなくなつて一週間になつたのだ。

ロギギはギロロの家にいた。別にそこが実家でもないので、自分がいる必要はない。夢だつた。不思議夢である。

「またか・・隊長のなら今回の事件の手がかりになれば嬉しいなー・なんか、前回のケロロたちの気持ちわかつたかもなー」

苦笑しながら歩いていると、声がした。耳を澄ませば、若干若いがガルルの声と父親の声だつた。

「・・・・・ガルルの記憶か？うわつ始めてかも・・・・・」

少々、わくわくしながら、ロギギは部屋に耳を澄ませた。

『マジヨジョが死んだ・・? そんな馬鹿な！あの子・・昨日ギロロと見舞いに行つたが元気そうだったぞ!』

『突然容態が悪くなつたそうだ・・そのまま、亡くなつたとな・・諦めろ』

「え・・・? マジヨジョが死んでる？でも、いるんだろう？隊長が会つたつて・・どうことだ？約束はどうなるんだよつー！」

そのままロギギは闇に包まれた。

何も進展もなし。あれから三日、あれ以来、相手の方は出方を見せていなかつた。こちら側にしては情報が少なすぎであつて、場所まで特定できなかつた。そんなある日のこと・・

「ガルル中尉殿、話とは?」

「・・・・マジヨジョのことで・・・

「マジヨジョ? なにか思い出した?」

司令室にはケロロ小隊、ガルル小隊、反ケロン軍皆がいた。ガルルの召集によつて

「それが・・」

「マジヨジョが死んでるって話?」

「は?何いつてんだ?ギロロが実際に・・・」

「俺もそう思う。けど、視たんだ。不思議夢でガルルと親父さんが話しているのを」

「・・・そうだ。最初、ケロロ軍曹たちに聞いたとき、まさかと思つたんですけど・・・同名の可能性もあつたんです」

「だけど、俺が視た不思議夢とかで、不安になつたお前は確認した。違うか?」

普段と違うロギギの雰囲気にガルル小隊は息を飲む。ケロロたちは最早今回でよく見るので慣れたモンだ。

「・・・やけに頭が切れるな・・・そうだ。親父に連絡して、確認したんだ。マジジ・・マジヨジョの兄が行方不明になっていることも聞いた」

「兄・・?」

「ええ、マジヨジョの両親は両方とも軍人で科学者でした。それがマジヨジョが亡くなる一年前に任務で殉職し、二人だけになりました。幸い兄マジジが成人し、軍人としていましたので、病院費は困らなかつたのですが」

「マジヨジョが死んでしまつた・・それ以降マジジは軍人をやめて行方不明」

「どこから知つた?まあいい。その後の流れは今ロギギが言つた通りです。」

「じゃ、その兄貴が一番怪しつてことがありますか?」

「しかし、ギロロくんはマジヨジョ殿と会つたと言つていたでござるよ?それはどういう説明になるので?」

「・・・。マジジは両親と同じく科学者として軍に所属していた。クローン技術を専門としてな」

ガルルが言つた瞬間、反ケロン軍の皆は一瞬硬直した。

「・・もしかして、ギロロが会つたって言つマジヨジョって・・・

「・・・まだわかりません。」

だが、それしかないと思う。ロギギは直感的に思った。ギロロにしかないはずのマジヨジョとの約束の記憶、だが、それは自分にあるもの。ロギギはなぜか、言わなければよかつたと思った。その理由はわからないけど、でも、言わなければこれまで胸が痛くなることはなかつただろうか。

夏美たちはリビングにいた。ティオラもバイルと敵対した時は傷ついたが今はなんとか回復している。

「軍曹たち・・無茶してないといいけど・・」

「平和な暮らしつて・・・ほど遠いわねー」

夏美は茶を啜りながら、言う。ティオラも苦笑していた。すると、突然ティオラが立ち上がった。

「ティオラくん？」

ティオラはそのまま、窓を開く

「出できなさい。そこにいるのはわかっていますから」腕を変形させ、正面を向きながら問うた。夏美たちが不思議に思い、庭を見ると、そこに一人のケロン人がいた。

「ゴーグルをしており、白衣を着たいるケロン人だった。

「ちょ、no! 敵だからな。俺は！ 渡すモンがあるから来たんだって！ テメエの兄貴とハギギたちじゃ、警戒されて、渡されねえからな。わかったか？」

「・・・」

「信用しねえのはわかる。だが、してもらわなきゃー困る。」

ティオラは警戒したままだった。ケロン人は困ったように頭をかく。

「カガガ・・？」

「んあ？ おお、ガルルじゃねえか」

「ガルル中尉・・知り合いで？」

「・・・ケロン軍で・・昔、マジジの上官だった人です・・」

「そ。まあそとは言つても今は逆転してるがな」

『！？』

カガガの言葉で全員が固まる。

「そこにギロロもいるのか！？」

「いるなら返せ！」

「ガルル・・オメエのブラコンも相変わらずだな・・・はあ・・・ヒナタナツミツてどいつだ？」

「・・・へ・・? 私だけど・・?」

「ほらよ」

そういうて、カガガは夏美に向けて投げた。

「・・・ペンドント・・?」

紅色のシンプルのペンドントだつた。

「・・・惚れたのか」

「なんで、そーなるんだよ！テメエはー#おかしいだろうが！#いや・・そんなのを送るから・・」

「話聞け#まずは#それは、ギロロの魂を封じ始めたモンだ。マジジによつてあいつは意識を封じられていた。このままじゃマジジが解くまでギロロの意識が戻らねえと思ってな。マジョジヨの魔術でそれに封じ込めた。体の#ほつま#ひつちで任せろ。じゃーな」

「！？待て！」

「ちつ・・いねえ・・さつきの奴の言葉が本当なら、それにはギロロがいるつてことか。夏美、どうする？テメエが持つてゐるか？」

「・・・・うん。あたしが持つてゐる」

夏美の返答でケロロとケルルは互いの顔を見合させ、頷く。

「わかつたであります。何かあつた時は知らせてくれるとー・・

「OK。知らせるわ

「かたじけない！」

その日はもう、誰も来なかつた。

「渡された？」

「ああ。かなーり、警戒されたけどな」

「そらそらだらうな・・・さて、後はマスターの体か・・・

「流石にねー、どう動く?」

「・・・キルミランがあいつが使ったときに動く。」

「「ア解」

真実と魂（後書き）

タマ：はいっバトンタッチしましたよー！

タナ：ですね～今回、僕達の台詞が少ないですよね～

タマ：でも、タルルよりはマシですよ？

タナ：？

タマ：タルルの場合描[画]すらないですかうつ！

タル：ちょ、師匠つひどいツスよ～；ありますよつ描[画]つ！次  
は起動歩兵組ツスよ！

赤い悪魔の真意と紳士の右腕の気持ち（前書き）

時間があれば一話連続投稿したいと思います

## 赤い悪魔の真意と統帥の右腕の気持ち

夏美は草原にいた。勿論夢だった。

「ニニ・・・どこ・・?」

呆然に周りを見渡す。草原以外は何もなかつた。

ザツ・・と後ろに気配がした。夏美は振り返つた。その先には自分が会いたいと願つているのにいなくなつてしまつた、相手だつた。

「ギロ・・!」

だが、その声は相手に届く前に相手 ギロ口によつて、口をふさがれた。

『ダメダ・・オマエガコエヲダシタラ、ヨビダシタイミガナイダロウ・・・』

夏美はここにいるギロ口が本物だと理解した。

『マジヨジョハワルクナイ・・ジキニマジジガウゴク・・』

「(マジジ・・?誰?)」

『キルミラン・・カガガタチハミカタダ・・ハギギニアツタラツタエテクレ・・ケロロタチニ、シタガツテクレッテ・・』

そういうと、ギロ口は消えて行つた。

「ギロ口つ!」

夏美は叫んだ同時に目を覚ました。時計をみ、時刻は5時を示していた。夏美はしばらく呆けていたが、すぐにケロ口の部屋に賭けて行つた。

「ボケガエルつ!」

夏美が部屋に入ったが、ケロ口の姿はない。ケロ口たちは司令室で修学旅行のように寝てゐるのだ。夏美はいるであらう、司令室に掛けを行つた。

「ボケガエル!」

「うわあ!/?はい!/?敵襲でありますか!」

「違つわよー。ギロロが・・あたしの夢に出てきたのー。夢にー。」

「・・・。夢え？ まつたく・・・」

「待て・・夏美、夢の内容話せ。」

「う、うん・・・」

夏美はすべて夢の中でギロロが言つたことをケロロたちに話した。  
「マジジって・・確か・・・」

『マジジによつてあいつは意識を封じられていた。このままじゃ マジジが解くまでギロロの意識が戻らねえと思つてな』

そうマジヨジヨの兄でギロロの意識を封じ込めた張本人でもある。ある意味で言えば黒幕である。

「本当にギロロが？」

「ええ・・確かに言つていたわ・・マジジが動き出すつてキルミラ  
ンのことも言つてたけど・・詳しく述べわからなかつた・・・」

「そりでありますか・・・」

「・・・夏美、これ、預かつていいか？」

ケルルはペンダントを見ながら呟く、全員がケルルの方に視線を  
向ける。

「大将？ なんで・・・？」

「正確には口ギギにだ。口ギギはギロロと波長が合つ。もしかすれば不思議夢も視られるかもしけねえ・・・」

「・・・わかつたわ。口ギギ、はい」

「い、いいのかよ？ ; これには・・隊長がいるし・・」

「大丈夫よつあたしも視れたのだからあんたが視れないはずがない  
！」

「どんな断言の仕方だつ・・・」

力説する夏美にツッコミを入れる。口ギギは不安になつた。

「大丈夫でありますよつ！」

「お前もなんで断言するんだつ・・・」

ギロロがいなくなつてツッコミにせしくなる口ギギであった。

「隊長、本気で早く帰つてきて・・」

ロギギは涙目になりながら、ペンドントに話しかけた。

そして、早速寝かされたロギギ。ロギギも反対はしないが、寝づらいので睡眠薬をもらひ「」とした。

「あれ？ 成功したのかな？」

ロギギは草原に居た。起き上がりまわりを見渡しても草原しかなく、ギロロの姿はなかつた。

「場所には到着したけど、肝心の隊長がいなきやー意味ねえよ…」  
ロギギは起き上がり、周りをもう一度見渡した後、歩くことにした。

ロギギが不思議夢に入っている頃、ケロロたちはそわそわしていた。

「まだ、ロギが入つて一時間もねえぞ…」

「わかつてるでありますよつーでも、不安なんでありますよーー！」

「だーつーうぜえー暴れるな！ #」

結構大変なことになっていた。

再び戻つて不思議夢の中、ロギギは十分ぐらじ歩き続けていた。

疲れはないがこいつも景色が変わらないとつまらないものだ

「たいちょーたいちょーどーですかー？」いるなら返事してくださ~い

ガザガザとそこ等辺を漁りながら進むロギギ。先ほどから読みかけているのだが見つかる様子が無い。

「ホントに成功してんのかあ？ 隊長の意識が夢の中になつてことかな？」

ぶつぶつと言しながらロギギは先に進める。しばらくすると湖に出た。かなり澄んでおりケロン星もあるかわからないぐらい綺麗だった。

「うわー・・綺麗な場所だなー・・ケロン星にあるかないかだな・・こんなの」

ロギギは湖に近づいて足を付けた。丁度疲れた気分だったのでここで休むことにした。すると・・

ガサツ

ロギギが音がする方向、後ろに視線を向けると、ギロロがいた

「隊長！」

「まったく・・貴様らは・・」

「う・・隊長ー！」

「うおつ

「どこに行つてだよつ！みんな隊長がいなくなつて寂しがつてんだぜつなのに・・！」

ロギギがギロロに抱きつき大泣きし始める。ギロロはそんなロギギに驚いたが、頭を撫でしばらく好きにさせていた。ギロロ的には自分の記憶はマジジによつて眠らされたという記憶しかない。だが、断片的に夏美と会つた記憶もある。何故だろつか

「落ち着いたか？」

「おう・・」

ロギギが落ち着いてきたので、二人は湖に足を付けながら話し出す。

「では・・ここは夢でマジョジョが俺の魂を今ロギギが持つてているペンダントに封じ込めたんだな？それでお前と俺が同調して同じ夢を見ていると？」

「そ。でも、問題はそこじゃねえんだ。キルミランも奪われた」「キルミランだと！？」

「その様子だと、本当に知らないんだ・・じゃレイド入つて知つてる？バイルつていう奴と一緒にいた」

「ハギギだな。マジジの組織でレイド人は奴しかいない。」

「ハギギつて・・隊長の？」

「そうだな・・手当てをしたら何故か・・」

「はははっ隊長の人徳人徳」

「カガガか・・まさか、ガルルの知り合いとは思わなかつたな・」「会つたことない？」

「ああ」

水をぱしゃぱしゃとしながら、報告する

「軍ではないな。組織に入つて初めて知つた。だが、マジジは何を  
しようとしているんだ? わからん・・・」

「・・・。隊長。俺達のことを気にしなくていいよ? 護りたいとか  
全員が思つている。隊長がいなくなつて、皆悲しんでいる。隊長は  
悲しくないの? そんなはずねえだろ?」

ロギギが真剣な目をして真つ直ぐギロロを見たギロロは自然と視  
線を逸らす。

「だが・・・俺は・・・」

「えい。」

「! ?」

バツシャーン・・・といい音を立ててギロロは湖の中に落ちて行  
つた。

「なな・・・何を・・?」

「隊長。自分が裏切り者だと思つてる? それは違う。睡眠薬をケロ  
ロたちや大将たちに盛つたからそんなこと言つのか?」

「つそつそ。俺はあいつらに薬を盛つた。裏切り者になるつ!」  
「誰もそんなこと言つてねえし、睡眠薬のことはガルル小隊しかし  
らない。裏切りのことは誰も知らない。だからさ・・・隊長は帰つて  
きてくれよ。皆ひとつちゃ隊長はすっげえ大切なんだ。隊長がいな  
きやみんな通常じゃねえんだぜ?」

「嘘だ・・・」

「嘘じやないわ」

ロギギはさうつと言つた。ギロロは湖に入ったまま呆然としている。

「ロギギ・・・」

しばらぐ、沈黙が続いていたが、やがて口を開いた。

「ん?」

「・・・マジジを止めるために協力してくれないか・・? 今更俺が  
言える」とではないが・・奴はキルミランを使ってマジョジョを蘇

「らせる気だ」

「いいけど。蘇らせるつて？マジヨジョはいるじゃん。だから、蘇らせるつてここのは間違いなんじゃねえの？」

「そこは俺にもよくわからん・・・」

「わかんねえのか・・・」

「う・・すまん・調べようと思った矢先に眠らされたからな・・・詳しくはわからんのだ。ハギギたちが何故キルミランも奪つたのかも知らん。」

ギロロを湖から引き上げながら、ギロロの言葉に相槌をうつ。  
「それは・・・ケロロたちが言つていたけど、キルミランは破壊しかしないんだろ？なら、持つて言つてもどうじよつも無い気が・・・」「だから、俺も不思議に思うんだ。マジヨジョはいるのに、蘇らせるとは・・?」

「今回わかったことは、マジジの野郎がマジヨジョを本格的つて言い方おかしいけど、本格的に蘇らせるのが目的。隊長が『デレた』」「！？ちょっと待て！なんだつ？その『デレたつて言つのは…』

「え？ケロロたちに言つたら喜びそうなモンだしなーつて。」

ケロロ達の想いをまったく持つてしての鈍感をいかんなく發揮しているギロロがそんなことを言つてもわからないだろう。案の定、表情が何を言つているという顔をしている。

「じゃ・・戻つたら、隊長が協力要請を出し解けばいいのかな？」

「ああ・・・今更言えることではないがな」

「いいよいよ。の人たちのことだからきっと、氣にしてないしない。あつでも大将は最初かなり、カンカンだつたぜ？」「

「！？やつぱり、怒つとるではないかつ！」

ロギギはさつと指を突き出し頭にやつて、鬼の角を示す。それを見たギロロの顔が青ざめていくのがわかる。

「あははっ隊長、変な顔ー」

「貴様な・・!」

「ヤベツ

ロギギはギロロの変化に気がつき、すぐさま逃げる。ギロロも追いかけていく。

しばらくすると、それなりに疲れるので一人で野原で寝転がつている。

「はー・・久しぶりかも・・こんなの・・」

「まつたくだな・・・そろそろ、行くのか?体が透けてるぞ」

「かもね。今度は隊長の体で会おうよ」

「そうだな・・・じゃな」

「うん。隊長。またな」

そう告げると、ロギギは消えた。ギロロはしばらく、そこを見ていた。

「ロギギ・・貴様はこうなることが無意識にわかつていたかもしけんな・・だから、あの時もまたなつて言つてくれたんだな・・」

赤い悪魔の真意と統帥の右腕の気持ち（後書き）

ケル：へいへい。タイトル解説いくぜ、統帥の右腕・・俺の右腕は  
ロギギだからなー  
ケロ：サラ殿じゃないの？  
ケル：おう。あいつには密々に關しての仕事しかさせてねえ、反  
ケロン軍の任務云々については一切関わらせてねえからな  
ケロ：へえ・・

意識が浮上し、戻つたはずのロギギだが、闇の中に居た。

「・・・あれ？；俺、起きるはずじゃ・・なかつたけ？」

困惑しながら周りを見渡すがどこを見ても一面の闇しかなかつた。

「・・誰かいるー？」

『なるほど・・ギロロとガルルのクローンといつ』とは俺とも従兄弟といふことかな？』

「誰だ！？』

『そんなにカカツしなくてもいいや。俺には今体がないのだからな』

「？何言つてるんだ？」

『言葉通りさ。体はない。ある意味精神だけが存在しているということだ。』

「？？つまり、現実世界でもあんたの体はなくて、ここで精神だけが漂つてるってことだろ？」

『そうだね。簡単に言えばだな。』

ロギギの目の前に現れたのはぼんやりとしていてはつきりとしない人物だった。何かを着ているのか布が擦れた音がした。そいつは指を鳴らすと、ロギギの近くに椅子が出た

『まあ座りたまえ。長い間ここにいると、使い方も自然とわかつてくれるんだ』

「へえ・・」

そこは素直に感心するロギギ。目の前の男の声をどこかで聞いたことがあるのだが、それが思い出せない。これほどイラつくのはないだろう

「あんたは何してえの？俺を呼び出しだぞ」

『気をつけろと言いたいんだ。連中は厄介だ。そこにある闇に付け込む。』

「？？よくわからんねえ・・その連中とかつて誰だよ？わかんねえのに警戒できるわけねえだろ？」「

『名は・・アビリタ。連中には氣をつけた方がいい・・』

ロギギはその名を聞き覚えがあつた。ならば何故氣をつけなければならぬのだろうか。だが、意識が遠のくロギギが知ることはなかつた。

ロギギが睡眠薬を飲んで、夢に旅立つてから、三時間経つていた。五時からしていたので、現在は八時になつていて。子供であるタマ・タルル・トロロ・ルククにモアは熟睡である。他もそれなりに眠そうだった。

「ん・・・？」

「起きたか・・」

「たいしょー・・おはよー・・・」

「おう。おはよ。」

「何時間寝てた？」

「ざつと二時間ぐれえだな」

「うわ・・かなり、寝てたんだ；」

「そうだな」

ロギギが起きたと言つのに、全員が虚ろな感じだ。今喋つてるケルルでさえ、意識が混濁しているのか、いつもの覇氣は感じられない。そんなことを考えると、ケルルがロギギのお腹辺りに頭を下ろした。

「？大将？」

「るつせえ・・寝かせる。眠い。」

短く言つと、ケルルはあつさりと寝てしまつた。ロギギはそんなケルルに呆然としながら、静かに、体勢を変えて、枕を添え、布団をかけてあげる。他にも意識が混濁しているケロロたちにもかける。「そり・・五時から起きてたら眠いよな・」

ロギギは苦笑しながら、銃を取り出し、ギロロと回しよじつに磨き

始める。

ケロロが目覚めて、最初に聞こえたのは何かを磨く音。この音とは聞き覚えがあった。何度も家事をしている横で鳴っていた音だ。

「・・ギ・・ロロ・・・？」

「あつケロロ。起きた？」

不意に呟いた言葉だが、ロギギに届かなかつたのか、届いたのかわからないが振り返つた。そこで初めて、この音の発信源がロギギだと気づく。

「ロギギ・・? 起きてたんで?」

「うん。一時間ぐらい前かな? 隅意識が混濁してたしね」

「そうでありますか・・悪いでありますな」

「いえいえ」

ケロロは欠伸をしながら、周りを見渡した。

「まだ、寝てるでありますな・・既」

「そりや五時から起きてたらな・・」

「しばらく二人だが、上に行くことにした。

「あら? おはよ一口ギギ。なんか視れた?」

「ぱっちり。隊長にも会えた」

「本當でありますか! ?」

「おつよし隊長自身はペンドントに入つてからの記憶が曖昧だけどさ。意識がある時の記憶ははつきりしてたぜ」

まあ詳しいことは全員がおきてから話すが

その後すぐに全員が起床し、ロギギは全員に不思議夢で何があつたのかをすべて話した。

「なるほどな・・完全のマジョジヨカ・・」

納得したように咳くケルル。

「じゃ、伍長さんが会つたマジョジヨをとつて何者なんですかね? 「もじへは、マジジ殿ことつて、そのマジョジヨ殿は偽物つてことで」「じやるわうづか?」

「ストップストップ！ 考えてもキリがないありますよつーとにかく、マジジの目的はマジョジョ殿の完全復活ありますっ！」  
出したらキリがない疑問にケロロは待つたをかけた。かけられた方もケロロの言うとおりなので考えないことにする。

その頃マジョジョは

「はつくしょん！・・？」

「鼻水拭け。汚いから」

くしゃみをして、ハギギに叱られていた。

「ん・・誰かが噂をしてるのかな？」

「それはない。」

即答するハギギだが、マジョジョが正解だつたりする。

「ぶ・・ハギくんの意地悪、ケチ、鬼、根暗」

「なんで、そこまで言われなきゃいけねえんだ！？」

「まあまあ・ハギ兄・」

怒るハギギを抑えるバイル。

「ん？ どつか行くの？ 姉貴」

「うんっ兄さんに呼ばれていてねーじゃ行つてくるよ。何かあつた

らよびしく

「ラジャー

「そのまま死んで来い！ #」

辛辣な言葉を言うハギギだが、死なないといふことがわかつていいからこそ、そういうのだ。

マジョジョは兄・・マジジの部屋に面した

「兄さん。いつたい何用？ ギー君の体を返してくれるといいな。」

「お前の役目は終わつた。今日、この時をもつてな・・！」

マジジが手に持つているのは小瓶、それをマジジは落とした。

マジョジョは・・そこで意識をなくした。

幻影と始動（後書き）

ギロ・前回でもやつだが・・

ロギ・ん?

ギロ・俺が中心だと言つわりには・・俺の出番がさほどないな  
ロギ・・・。あはは・・そういわれてみればなー・・しうがなくね?

黎廻・君、使いやす・・くはないキャラだつて、作者が言つてるし  
二人・・・・。黎廻、お前はまだ出たらダメ・・・・;

## 奪還元へ（前書き）

黎廻…さて、今回は長いよ。ギロロの体を奪還する内容いろいろなうじ  
ね・・どうなるんだい?うづ?

その頃、ハギギ達はカガガの研究室にいた。

「さて・・まさか、こんなに早く出るとは想わなかつたなあ・・・

「マスターをどうするかつて問題だな。」

「姉貴・・大丈夫か・・?」

「あいつは殺しても死なねえ#」

「あはははっ。言えて」

とその時爆音が響いた。

「なんだつ?」

カガガが操作して、映し出すとモニターにはキルミランがいた。

否、キルルがいた

「当等・・おつぱじめやがつた・・つ」

カガガがそう呟く。それを聞いて二人は動き出した。無論、ギロ口の体奪還するためにである。

「退け!」

ハギギは自前の鎌を使い、どんどん見張りを倒していく。見張りも何度か見知っている顔がある。だが、そんな程度で躊躇はしない。「兄貴の体を返せ・・!」

バイルも容赦なく相手をなぎ払っていく。カガガはその後ろを大きな機関銃を持ちながらテクテクと歩いていた。

「悪いけど・・返してもらうぜ?」

棒餌をかじりながら言った。

「いや~、ギロ口の魂、連中に預けておいて正解だったな。」

「まったくだ」

「でも、連中どいつもって合流すんだ?」

バイルの目にはティオラに会いたくないと明らかに映し出している。

「・・・。後で考える」

「キルル・・！」

「これがキルルか。始めて見るな  
焦るケロロと妙に冷静なケルル。だが、状況は一刻をも争うのは  
事実だつた。

「いったい、キルルを復活させて、マジヨジョを生き返らせるつて  
どうやつて！？」

ロギギが悲痛な声で叫んだ。ケロロたちは実際に体験したからわ  
かる。あれは破壊しか生まないとこじりこじりと。だが、マジジは知ら  
ないのだ。

「そんなことより、色々順序が滅茶苦茶だな。ケロロ達から聞いた  
話によれば、まず×印をつけてエネルギーを奪わねえと起動しねえ  
んじや？」

「そのはずでありますが・・！」

「軍曹ー!! ララもいよいよ！」

そう、今回はケロロも誤算だった。まさか、負のエネルギーを吸  
い取らずに実行を始めるとは思わなかつた。

「ミララがー！？」

「うんっ全然見当たらぬー！」

「ゲロー！」

「隊長、おそらく、キルミランは改造されてる。正確に言えれば、あ  
れはキルミランじやねえ。複製だ」

「複製・・？」

クルルが言つた言葉を反芻させるケロロ。クルルはとんでもない  
速さでパソコンのキーを叩く。

「ああ。第一ただの科学者がこんな短時間でキルミランのミララや  
負のエネルギー云々を解除できるはずがねえ俺でも最低で一週間以  
上は必要だぜえ・・！」

「じゃ・・あれば複製って可能性があるつてことありますかー・・

』

ケロロが呆然としたように呴いた。いつの間にか惑星麻酔がなされていた。

「あそこから出てきたってことは、さ。あそこに連中のアジトがあるつてことだよな？」

「ああ。おそらく」

ロギギの呴きに答えるケルル。以外に近い場所にあつたと思つ。

「ケロロ。どうする？」

「・・・・・クルル曹長。今キルルの繁殖速度は？」

「大体1分につき一一体だなあ」

「我輩たち全員でキルルを殲滅するであります！」

「ギロロは・・？」

「・・・・・こにはカガガ殿たちを信じるしかないであります」

「癪だが、それが一番いいんだろうな」

ケロロの決定にケルルが呴くが反論氣味な物はない。ガルルも少々不服なのか顔をしかめているが声には出さなかつた。

「それでは各員、キルル殲滅を行うであります！」

『了解！』

その頃、ギロロは暗闇にいた。外でキルミランが発動された同時に何故かは知らないがここが真っ暗になつてしまつた。

「そして・・妙に体もダルい・・な・・」

『それはマジョジョが意識を失つてゐるからだ。だから、ここを息苦しく感じる』

ギロロは声がした方に顔を向けると浅葱色のケロン人がいた。

『貴様は・・あの時の・・・・！』

『そう破壊プログラムに飲み込まれた際、自分に呼びかけたケロン人だ。』

『貴様は・・何者なんだ・・・！？』

『それはまだ言うべきじゃない。だが、これだけは信じてくれ。私は

はお前の味方だ。お前を壊したくない。『

1100

ギロ口が尋ねようとしたが、世界が変化した。あちこちに輝が入ってきていた。ギロ口の意識も遠くになつた。

「だあーーーうぜえ！マスターの体が見つからねえぞー！」

「あ。ハギ兄！いた！あそこだ！」

四二〇

マスター!

ハギキはタツシユでギロロの元へ向かっていく。が、何かにぶつ  
かって転ずる。

「」

何してんだ；お前

何が壁みたしたのがある、か

透明な壁があつた。

卷之三

「アマゾン」

がつた。

から、こうして腐敗しないために保存したんだ

力ガガは壁を叩きながら、冷静に分析する。力ガガたちはバレて

都合だ。

悪い、時間稼ぎヨロシク

「十分なつ！」

カガガの言葉にハギギが答えた。

ケロロ達は分裂していつたキルルを倒していく。その時夏美が声を上げた。

「ゲロ？ どうしたんですか？」

「・・・なんか・・ギロロの気配がなくなつた気がする・・・」

「ゲロ！ なんですよーーー！」

それは困る非常に困る。

「どうこう」と？

ロギギが夏美に近づき尋ねる

「なんか・・その、ペンドント受け取つてから、いつも希薄だけど、ギロロの気配は常に感じてたの・・」

「うん・・それは同感。それがなくなつたってこと？」

「さらに希薄になつた気がするの・・」

「大丈夫だつて！ 隊長が死ぬはずねえ！だから、帰つてきたら、言つてやろうぜ。遅い！ つて！」

ロギギは笑いながら、言つ。

「・・・そうね。絶対文句言つてやる！」

「だつたら、奢らせるか。まともに食えなかつたからな。いきなり団子。」

「賛成！」

ケルルの意見に同意して、ロギギはキルルに向かつて行つた。ケルルもキルルの塔を一瞥してからキルルに向かつた。

「大丈夫・・あんたはこれぐらいで死なないもんね・・」

夏美もペンドントを一度握り締め、キルルに向かつて行つた。

「おいつーまだかつーーー？」

「後少しだーーー！」

ハギギたちは元仲間を相手にし、ギロロを阻む壁を解除していた。

「よしつできた！」

カガガが言つた直後、鎖の擦れる音がした。カガガが後ろを見る  
と元仲間が鎖によつて縛られていた。

「わー・・お見事」（棒読み）

「棒読みで言うなら言うなつ！」

ハギギはそう言いながら、ギロ口に近づいていく。

「冷てえ・・・」

「そらな。今は死んでるからな。」

「・・・マスターがゾンビつていうレイド入つていると思うか？」

「知るかよ；つていうかゾンビは体が腐つている人間のことだぜ・・・」

「ボケかましてる暇があつたら、合流しようぜ！・・・」

バイルの言うとおり今はボケをかましている場合じやない。早く

合流しなければならない。

バイルがギロ口を抱え、走る。

「後は・・魂だつ」

ギロ口が奪還完了された頃、ケロ口たちはキルルに妙な感覚を覚  
えた。

「ん～・・なんでありましょうか？この感覚は・・・」

「さあな・・・」

だが、その感覚が曖昧すぎて正確になにが違和感なのかがわから  
ない。ケロ口は必死に前回のキルミランのときを思い出しているが  
まったく違和感が思い出せない。

その時

「ヒナタナツミー・」

「カガガ！？」

呼ばれた方を見ると、カガガたちがこちらに向かっていた。

「ギロ口！？」

「バイルくんつ」

「はあはあ・後、説明・・よろしくつ！」

「体力がねえなら走るという選択肢を入れるな！・・#ヒナタナツミ

ツ そのペンドントを壊せ！

「へつ？ これのことつ？」

「そうだ！ つてかキルル邪魔だ！」

夏美はキルルを切り裂きながら、ハギギの方に向かう。ハギギもこちらに来るキルルを切り裂く。

「でもつ壊したりしたらギロロがつ」

「問題ねえ！ マジョの奴はペンドントが壊れたらマスターの魂が体に帰るようになつていいんだから・・！ 壊せ！」

「・・・わかつたわ！」

一瞬夏美はハギギのことを疑つたが、夢でギロロが言つていたことを思い出したのだ。

『カガガタチハミカタダ・・ハギギニアツタラツタエテクレ・・ケロロタチニ、シタガツテクレッテ・・』

その言葉を思い出したのだ。ならば自分はギロロを信じると思いながら、ペンドントを思いつきり振りかぶつた。だが、キルルがその手を掴む。

「えつ？」

「しまつたつ」

「夏美殿おおー！」

一瞬どうすればいいかわからなくなつたが、ケロロの声でそちらに視線を向ける。

「ボケ・・ガエル・・！」

夏美はケロロに向かつて、ペンドントを投げた。

「ナイスピッチでありますつ！ つて、キルル来たー！」

追つてくるキルルに相手をしながら、壊す機会を伺う。

「（タママ／タナナ）インパクト！」

一人の技でケロロの前のキルルが一掃された。ケロロはチャンスだと思い。振りかぶる。後ろにもキルルがいるが気にせず振りかぶつた。

パリン・・！

## 合流と裏切りの隠蔽（前書き）

すみません；；昨日友人とプール行ってまして、更新が出来ません  
でした；；

## 合流と裏切りの隠蔽

「・・かたじけないでありますつハギギ殿」

「お安い御用だ」

ケロロの後ろのキルルはハギギの鎧によつて貫かれていた。

「ギロロはつ？」

「バイル！マスターはどうだつ？」

パンダントが破壊されたことによつて、ギロロの魂は体に戻つて行つた。

「体が暖かくなつた！大丈夫、戻つてる！」

バイルの言葉で全員が安心した。

キルウウウウ！！

「しつかし・・マジジはどこだ？」

機関銃を持ちながら、カガガは背中合わせのガルルに言つ。

「我々はまだ、マジジを目撃していない。そつちにもいなかつたのか？」

「ああ・・・」

「案外キルルに飲み込まれていたりしてな」

いつの間にか傍に居たケルルがそんな意見を出した。一応基地内は調べたがマジジらしき人物はいなかつた。

「・・・おい、否定しろよつ！カガガ中将殿」

「元だつて・・・なんで知つてんだ？つてガルルに聞いたら一発でわかるよな・」

中々、ケルルの意見が否定されなかつた。まさかとカガガも思うが・・

「あいつはかなり狂つてたしなー・・・飲み込まれる阿呆やらかしても、おかしくはねえな・・・

「・・・。そうか」

「力ガ兄！」

「あ？・・・！？」

バイルに呼ばれたかと思うと、ギロ口が降つて來た。

「おわつ！？おいつバイ・・・ああ。わかつた忙しいんだな  
バイルの周りにはキルルが大量に居た。

「ギロ口はつ？」

「ガルル、テメエは目の前の敵に集中しろ。安心しろ、息はちゃん  
と吹き返してる」

カガガガが言うと、明らかに安堵の氣配が一つした。  
「マジヨジョつていうやつは？」

「さあ？マジジに呼ばれて以来行方不明だつつの。」「

「・・・ん・・・？」

「ギロ口つ」

カガガガが抱いていたギロ口の意識が戻つてきた。目の焦点が合つ  
ていながらとりあえず安堵する。

「・・・・・・力ガガ？」

「おい、今、俺忘れられてたよな；」

「・・・なんだ？どういう状況・・？」

頭が回つていないので、ギロ口は困惑顔でキルルを見ている。

「よおギロ口。おはよーさん。後で殴らせろよ？今の状況は・・キ  
ルミラン（改悪）が発動中だ。」

「ケルル・・・」

『先輩つ上だ！』

ギロ口がケルルに話しかけようとしたら、いつの間にか付けてい  
た通信機からクルルの声がした。

ギロ口がクルルの指示で上を見上げると、キルルが攻撃してきた。  
それを皆散つて避ける。

「クルル・・・」

『よお先輩。お久しぶり』

「ちょっとー我輩たちもいるでありますよー忘れるなー！」

ケロロもキルルを倒しながら主張していた。

「隊長。」

「・・・ロギギ」

「久しぶり。隊長」

「・・・ああ。貴様の言つとおりになつたなロギギ。」

「たいちょーの自業自得ー」

「うつ・・・」

何も言い返せないギロロであった。

「皆さ、怖かつたんだぜ? 大将だつてさ」

「それは・・すまん・」

「まつ隊長が無事ならいいや」

ロギギはキルルを打ち落としていく、ギロロもロギギから借りた銃で撃ち落す。すると、一気にキルルの数が減つたのだ。

「なんだ・・?」

「一気に減つたでありますな・・ ギロロつー!」

とりあえず、皆がギロロの元に集まつた。

「ケロロ・・皆・・・・ その・・・」

「ほらほら。隊長ー頑張れー」

ロギギに押されながらギロロはロゴーもある

「その・・俺は・・お前たちに酷いことをした、すまない・・・

「ゲロ? 酷いことつて?」

「だからつ睡眠薬とか仕込んで・・・」

「サラー俺達はギロロからもらつた菓子食つ前から眠たかったよな

? ?

「はいっギン兄が来たらすつじへ安心して睡魔に負けたんですよな

つ?

「・・・?は?」

ケルルとサラの言葉に素つ頓狂な声を上げるギロロ。自分が睡眠薬を・・

「だから・・ケロロたちにも・・・」

「だから・・・ケロロたちにも・・・」

「はて？ 我輩はその前夜ガンプラ作りで徹夜してすっごく眠たかったんですよーちなみにタママも一緒に作ってたありますから、タママも徹夜ありますよー」

『俺は隊長に頼まれた新兵器開発で徹夜してたからなあ・・・』

「拙者はその前夜、眠れなかつたんでござるが、ギロロくんのお茶を飲んだら安心して寝れたでござるよ」

次々に出てくるケロロたちの言ひ訳で、ギロロは混乱してきた。

「し、しかし・・・手紙つロギギに手紙渡したはずだつ！」

「ゲロつ？ 手紙？ それは知らないでありますなあー」

「隊長、変なところで頑固だぜ？ 手紙？ ああ、大将に渡した。」

「さて？ 確かに手紙を受け取つたが、ギロロからつていうことは聞いてねえな」

「・・・つ」

開いた口が塞がらない。とはまやじへいのじだとギロロは改めて思った。

「ギロロ」

「な、夏美つ？」

「・・・ギロロのバカー！」

「・・・？」

夏美はギロロに向かつて叫んだ。

「自分で何勝手に抱えこんで、あたしたちに相談もせざむにどつかに消えるのよー皆、探したんだからねつ理由はこの際どうでもいいわ！ 抱え込まずにあたしたちに相談してくれたつていいじゃないのよー相談ぐらい乗つてあげるし、ボケガエルたちだつたらあたしたちと違つて相談にも乗つて、問題を解決してくれるぐらいの力はあるじやない！ なんで・・・消えてるのよ・・・」

後半になつてくると夏美の声は涙声になり、完全に最後には泣いていた。

「な、夏美・その、すまん・・・」

「帰つてくるわよね？」

「そ、それは・・・」

「ケロロ小隊起動歩兵ギロロ伍長はスパイ活動をした際、敵の捕虜になり、生命活動を一時停止させ、再度生命活動を開始した」

ギロロが口<sup>ヒ</sup>もつていると、今まで黙っていたガルルが発言した。

「先に入つていたハギギの協力の下活動」

「そうだな。俺はマスターに言われてあの組織に先に侵入したし、別にマスターは皆を裏切つたわけじゃない」

「はい。けつて一つと。処分はケロロ小隊隊長ケロロ軍曹へ。」

最後に決定したのはカガガだった。

「あ？ いいの？」

「隊長さんだし」

「では・・・」ほん。ギロロ伍長、今回の事件の行為の処罰を言い渡す！

「あ、ああ」

緊張しながら、ギロロは結果を待つ。

「今回のこととは不問とする！ ただしついきなり団子全員分の奢り代及びマジョジヨ殿たちの救出はギロロがするであります！」

「すっげえ・・ そんな処罰・・ 聞いたことねえ・・ つ」

「カガガ、笑いすぎだ；」

カガガはケロロの言葉を聞いて、爆笑していた。

「バイルくん・・ ?寂しいの？」

「なつ！ 誰が寂しいだ！ 全然だぜつ兄貴は仲間のところに帰れて幸せそうだからいいんだよ！」

二人の兄弟が騒いでいると、ギロロがその様子に気づいた

「おいつバイルと・・・えと・・」

「ティオラ殿であります。バイル殿の弟でありますよ

「ティオラもこっち来いつ」

手で來い來いをしながら、ギロロは言った。その瞬間。

キルウウ！！

## 真の願い

キルルの声が木霊した。キルルが増えているが少し代わっていた。  
「・・・あれ？ 形が違うであります・・・」

「なんで・・・？」

ケロロが言つた通り、キルルの形状が違つていた。白色のはずなのに色が灰色になつていた。

「ギロロー・・マジヨジョ殿がどこにいるか知つてる？」

「・・・。生憎だが意識がなくなつていては聞いたがどこにいるかは聞いてない」

「聞いた・・・って誰に？」

「浅葱色のケロン人だ」

ギロロそういつた瞬間、ケロロたちが息を飲んだのがわかつた。

「？ケロロ？ 知り合いなの？」「ほらほら、ギロロ。目の前に敵がいるからな。」う、うむ・」

ギロロの疑問は力ガガの声によつて遮られた。目の前にはキルルが大量に居た。

「なあ・・・マジジがあれの中にいるんなら、呼び出されたマジヨジョもあん中に居るんじゃねえか？」

「確かになくはねえ意見なんだがな・・・」

ケルルの意見に力ガガが思案する。

「はいっギロロの腰にこの縄を縛つて・・・」

「ああ・・・もう少しキツめでも構わん気がするぞ」

「マスター、危険だと判断したら即効合図をしてくれよつ・ぜつてえー引っ張るから！」

「ハギギもちゃんと鎖で縛れる？あの巨大キルル。」

「舐めんな。マスターのためならやつてやる。」

「一応手伝う。」

「おう。」

ケロロが縄をギロロの腰に縛つており、その隣でハギギがオロオロし、その後ろでロギギが見当違いな心配をしていた。

「何してんだ？」

「ギロロの出した提案であります。クルル曰くあのキルルのお腹から中に入れるらしいでありますから、ギロロが入ると」

「なつ危険すぎるつ」

「わかっている。だが、今回のこととは俺が巻いた種だ。俺が解決するのがいいし、おそらくあそこにあるんだろうなあいつらは」

ギロロの言葉でケルルは唸つた。前回もそつだつたが自分はつくづくギロロに甘いようだ

「よし。これでいいか。ハギギ、頼む」

「了解！」

ギロロの命令によって、ハギギは手を地面について、力を入れる。地響きがして、巨大キルルの下から無数の鎖が出てきた。ギロロはケロロのソーサーでキルルの前まで来る。

「ギロロッ・・・

「・・・大丈夫だ。今度はちゃんと戻つてくる。」

そういつて、ギロロはキルルの中に入つて行つた・・

「俺達はキルルの雑魚をやるぞー鎖は傷つけさせんなー」

『了解!』

キルルの中は薄暗いと言つた感じだった。落ちていく中、ようやく止まつた。

「マジヨジョーマジジー」

ギロロが呼ぶが返事は無かつた。ギロロはもう少し奥に進んでいくと、声がしてきた。

「・・・?マジジ・・・?」

薄暗い世界の中でそこだけ唯一光を持っていた。中にはマジジがいた。昔の姿で

「・・・?これは、過去なのか?それともキルルの中で起こつてい

る現象なのか？・・マジョジョ！？」

そして、もう一人はマジョジョだった。それでも幼い。

「どうこういろだ・・・？」

『マジョジョ・・・ああ、私の唯一の光。やっと会えたね・・・』

「・・・っ

ギロロはその光に入つて行つた。

「！？誰だ！？」

「・・わあ・・ギーくんみたい」

マジジが警戒してマジョジョを背後へやる。マジョジョは暢気に自分を当てた。

「・・・これが貴様の幸せか？マジジ。こんな形でマジョジョを復活させて、満足か？あいつがこんな結果を望んでいたか？」

「な・・なんの・・話だ・・？」

「こんな空想、マジョジョを侮辱するような風景が貴様の望みだつたのか！？」

ギロロはなぜか苛立つていた。元々短気な分熱くなるのは早かつた。マジジのことはあまりよく知らない。兄・ガルルと同一年でほとんどのマジョジョとしか遊んで居りずマジジのことはガルルの方がよく知つているはずだ。

だが、マジジのことでこれだけは知つっていた。マジョジョのことを見た。マジジのことはあまりよく知らない。兄・ガルルと同一年でほとんどのマジョジョとしか遊んで居りずマジジのことはガルルの方がよく知つているはずだ。

「貴様はマジョジョのことを一番理解しているんじゃないなかつたのかつ？俺も幼い頃はよくマジョジョと貴様が一緒なのを見て、俺もガルルに甘えたこともあった！マジョジョにとつて貴様は一番尊敬できる人物だつ何よりもマジョジョを大切にしていた貴様が何故こんな風にした！・・確かにマジョジョが死んだことは俺にもショックだつた。唯一身内の貴様なら俺が想像できないショックがあつたんだろう。だから・・貴様はマジョジョのクローン・・・今のマジョ

ジョを作り出した。だが、それでは完全じゃないと思つた貴様はキルミランを利用した・・違うか？」

「ち・・違つ！私はマジヨジョを完璧に蘇らせる・やつ誓つたんだ！」

！』

ギロ口の勢いある言葉で一瞬ひるんだマジジだが、すぐに言い返す。

「私にはマジヨジョしかいないんだっあの子だけが私のすべてだつたんだつ・・」

「・・・・それは・・貴様が・・マジヨジョの死を受け入れていたからではないか？」

ギロ口がふと氣づいたことを口元に、呴いた。マジジは呆然としている。

「な・・何を・・」

「貴様は心の・・頭のどこかで理解していたんだ・・マジヨジョが死んだという事実を。だが、それを貴様は認めたくなかった。だから、こんなことをした。違うか？俺が知つてゐる限りそんな口調ではない。貴様はそんな自分を誤魔化すためにそんな口調にし、隠した。」

「違つ・・・私は・・・！」

「もう、諦める。ギロ口の言つとおりだ。俺はどこかで理解していだ・・だが、混乱していたのは事実だ・・だから、お前の言葉に乗つてしまつたんだろ？」「ううつ・・私はお前の想いを叶えてやるつと思つてゐるだけだぞ！？」

「そんなことをしても、マジヨジョは喜ばないし、俺も望んでいい。」

幼いマジヨジョの口から発せられるのはマジヨジョじゃない誰かの言葉。その言葉が誰なのかはいくら鈍いギロ口でもわかっている。早く返せ。それは俺の体だ。」

「何故つ？何故だ！お前はこれを望んでいたのだろう！？」

「違う。それはマジジの願いではない。マジジの願いを捻じ曲げた貴様の望みだ！」

“マジジ”は徐々に顔を歪めていった。ギロロはそんなマジジから視線を外さない。

「ギロロの言つとおりだ。俺はこんなのを望んでいない。例え望んでいたとしても、俺は死を選びあの世で一緒に過ごすことを望む。

「くそつくせつ！」

“マジジ”が喚ぐとマジジの体はガクンとして、倒れた。

「ど・・どうなったんだ・・？」

「どうやら出て行つてくれたようだ」

幼いマジヨジョから発せられた言葉はやはり自分の従兄のものだつた。

「マー兄・・？」

「・・・。今でもその呼び方で呼ばれるとは思つてなかつたよ

「ち、違つ！今のは違つ！」

「はいはい（相変わらず可愛いい）な・・ガルルが愛でるのもわかるよ」

クスクスと笑われ、ギロロの顔はさらに真つ赤になつていた。そこでギロロは氣づく

「なあ・・マジヨジョはどうなるんだ？」

「ん？大丈夫・・だと思つた。この中にいるはずだ、これは思

念体、簡単に言えば俺の記憶から構成されたマジヨジョだから

「なるほどな・・」

マジヨジョの体が徐々に消えて行き、最後には意識不明のマジジとギロロだけが残つた。

その頃外ではいまだにキルルが増量していた。巨大キルルは動こうとしているがハギギによる鎖によつて、鎖が擦られる音を出しているだけだ。

「キリガねえな・・」

ケルルが誰とも無く呟く、すでにボロボロだった。他を見渡すと口ギギやケロロたちも傷だらけだった。無傷なのは誰も居ない。

キルウウウ！

「いっつ・・！」

「ハギギつ大丈夫か？腕が・・」

ハギギの腕はすでに血だらけだった。鎖はレイド人と証とでも言える。

キルルが侵攻しようとしている。

「あの野郎・・力を増してる・・・？」

「なんか、色が代わってないか？」

キルルは段々色を変えていった。真っ白から灰色になっていく。

『先輩！聞こえてるかつ？』

「クルル？」

ギロロの耳にクルルの声がした。

「どうした？」

『外でキルルが暴走し始めた！早く一人を回収しねえとハギギの鎖が間に合わねえ！』

「わ、わかった！」

ギロロはマジジの体を抱え、マジョジョを探す。だが、あたりは一面薄暗い世界。マジョジョらしきものはいなかつた。

「・・・マジョジョ！貴様はこんな結果でいいのかつ？俺が知っているお前は何事も諦めないで・・・マジジのことが好きですごく尊敬していてそれを素直に言える奴だ！誰であろうがお前はお前なんだつ！」「・・・でもねギーくん。ボクは違うんだよ？ギーくんと約束したのはオリジナルのボク。今のボクじゃない『そんなモン関係ないつお前はどうなんだ？お前はどうしたいつ？お前はお前だろうが

『ギーくん・・・』

『どこからか聞こえてくるマジコジコの声に、ギロロが叫ぶ。

「だから早く帰るぞ！ハギギやカガガ、バイルも待つていりし、マジジだって、ここでお前が死ぬことを誰も望んじやしない！」

『ギーくん・・ボク、生きてていの？』

『当たり前だらつ！』

マジコジコの言葉に即答するギロロ。

「だから、せら・・早く帰らつ・・」

ギロロがどこからともなく手を伸ばす。しばらくするとその手を

掴んだ

『ギーくん・・ただいまっ！』

マジコジコはそのままギロロに抱きついた。その顔は今幸せそうだった。

『おかげり、マジコジコ。わい、時間がなによつだ。出るわ！』

ギロロはケロロヒドモトが上げる合図を出した

**真の願い（後書き）**

今日までのままでかなつ?

「合図きた！モア殿！サラ殿！」

「了解！」

ケロロに言われてアンゴルの姉妹はスピアの力を使って、ギロロの腰についている縄を引っ張った。

どんどん縄がキルルの中から出てくる、苦しいのかキルルが雄たけびをあげる。そうなれば鎖は音を立てる。

「頑張れハギキ！もう少しだ！」

「んなこと・・・！わかつてゐつ！」

ロギギも同じく鎖を手にする。その時

キルウウ！

バチ・・バチバチ！

キルルが雷を纏い始めた。勿論鉄でできている鎖にも繋がるわけで・・・

「ツアアア！」

「ロギギ！」

「ハギギつ」

ケルルとカガガが一人を回収する。鎖はどんどん切れていき、ついにはキルルは自由になってしまった。

「サラつ早く！」

「は、はい！」

気絶しているロギギを背負いながらケルルが空中に居るサラに声をかける。

「ケルル、カガガ殿・・・！一人の様子は？」

「大丈夫だ・・気絶してるだけ」

「ハギギもだ。」

「カガガ殿はハギギとロギギを連れて基地に戻つて欲しいであります。手当てを・・・」

「ケロロ一勝手に俺を戦線離脱させんな」

「同じくだ・・カガガ、下ろせ。もう大丈夫だ」

ケルルたちの背中で目を覚ました一人。

「ロギギはともかく、ハギギ、お前は手当てを受ける。それ以上鎖を酷使すると能力を失うぞ?」

「マスターが大変なのに俺が暢気に手当てを受けられるか・・・」

「ほりあ・・言わんこつちやねえだろ」

「ギロロがいたら、手当てを受けろって真つ先に言つてありますよ!」

「なら、言おうか?」

「おー!言つちゃつてよ・・・ん?」

ケロロが慌てて、後ろを向くと、ギロロがマジヨジヨヒマジジを抱えてそこにいた。

「ギロロ!出られたんですね!」

「まあな・・・」

「なにやら納得してねえ顔だな」

「いや・・ちよっとな」

ギロロは苦笑しながらマジジに視線を落とす。

『隊長、いいムードのところ悪いが、キルルの様子が変だ。そこにいたら、危ねえ!』

クルルの通信でケロロはキルルを見上げた。キルルは灰色になりながらも、自分の目の前で陣を出した。かなり複雑そう陣です。

「・・・わーい・・・」(棒読みです)

「棒読みで言つてる場合かつ撤退するぞ!」

ギロロがマジジたちを抱え込んだまま、ケロロに言つた。ケロロもその言葉すぐに動く、皆と合流した、その時

ドオン!

陣から光が出て町を焼き払いました。

「なつ・・・どう・・なつて・・?」

「惨いで!」ざるな・・・

「前に作った偽奥東京市にキルルたちを転送させとて正解でしたね～」

タママが暢気言つ中全員がその言葉に賛同した。勿論そんなことを知られてないギロロの頭上には？マークがある。

「ああ・・マスターは知らないと思つけど、マスターが入った瞬間に偽物の奥東京市にキルルを転送させたんだって、だから、目の前の町が破壊されても、偽物だから本物に影響はねえってさ。」

「そ、そとか・・」

ハギギの説明で理解したギロロ。そつとマジジたちを下ろして、

ケロロたちに近づく

「ケロロ・・話しておきたいことがある。」

「ゲロ？」

怪訝な顔をするケロロにギロロが先ほどキルルの中で偽物マジジとの会話をすべて伝えた。脱出する時に聞こえた声も

「奴は言つていた。『外に戻つたら覚えていろ。戻つたことを後悔させてくれる』とな、それを意味することはわからんのだが・・」

「まあ・・それがこの現状つてことでありますような。マジジ殿が何かに乗つ取られて、体を乗つ取られたマジジ殿はマジョジヨに非難をしなくてはならないめになつたというわけでありますか・・」  
「確かにマジジが私とか言う奴ではないな。軍に入つて公以外では一人称は俺だつたはずだ。」

ケロロの言葉でガルルが同意を示す。この中で一番詳しいのはガルルである。

「しつかし・・あのキルルをいつたいどうするかであります・・」

ケロロはいまだに陣から光を出しているキルルを見る、到底簡単にやられそにはないと思つ。

「一斉射撃してみるか？」「

「それで倒れるかな？」「

「やつてみなきゃわからん」

「そらそーだ」

起動歩兵組みは暢気にそんなことを言い出す。ケルルもそれを無言で聞きながらどうするかを考えていた。

「ケロロ。ここは悩んでいてもしようがねえ、なんなら、ロギギたちの提案に乗つてみるのはどうだ?」

「一斉攻撃? ··· そうでありますなあ悩んでもしようがないしね」  
ケロロがそういつた。起動歩兵である、ギロロ・ガルル・ロギギ・カガガの四人でキルルの前方に出た。

「行くぞ!」

「了解!」

ガルルの号令により、ギロロたちの攻撃がはじまつた。ケロロやタママはキルルの背後に回り、攻撃を加える。

キルゥウ!

陣が光つて光線を出す。それは当然前線に居る起動歩兵たちがいる。

『先輩···!』

「大丈夫だつなんとかわした!」

その言葉で後方にあるメンバーは安堵する。だが、キルルは光線をやむ気はないらしい。

『隊長···』

「なん、ありますか?」

『わかつたぜえ!あのキルルを止める方法がな!』

「ホントであ」 ドゴン!』

『ギロロ、ロギギ!』

「いててつ平氣平氣。ちょっと掠つただけだしな?隊長。」

「うむ。大丈夫だ。クルル、通信を続ける」

ケロロもギロロを見た目で大丈夫だと判断し、クルルに続きを促す。

『キルルの中にある、核を破壊すりやいい、あれは元々改造された奴だ。おそらくキルルの中に核があるんだろう』

『それを破壊すればいいのだな?』

『ああ・・・って先輩？まさか、行く気じゃねえだろ？』

「ん？行くに決まつて「ないから！」」

ギロロの言葉を途中で遮り、ケロロたちが一斉に言いました。

「ギロロつさつき、ただえさえ入つてたんありますよ！？次はどんなことがあるか分からないし、さつきのはマジジ殿がいてくれたからなんとかなつたようなモンでしょ！？」

ケロロはギロロの肩を掴んで、ガクガクと揺わぶる。

「・・・。そのマジジはどこ行つた？」

「あ？サラたちが見てるはずだが・・」

『お兄様つマジジさんガ・・マジジさんガいませんつー』

ケルルが言つた瞬間サラから通信が入つた。

「な・・だと・・？」

『少し目を離した瞬間にいなくなつて・・』

「ちつケロロつマジジが・・」

「わかつてるでありますつ」

ケロロも通信内容を聞いたので顔が蒼白になつている。

「こんな時に・・・！」

「な、なあ・・・ケロロ、大将。もしかして、マジジの奴・・キルルのところに・・」

ロギギが発言途中でギロロが双眼鏡を転送させ、キルルを見る。すると、キルルの目の前にケロン人が居た。マジジだ。

「いたつロギギの言うとおりだつ」

「何をしてるんですか！？」

マジジはギロロたちに気づいたんだろう。何かを話しかけている。遠くから見ているケロロたちには何を言つているかわからない。

「『後始末は俺がするよ』・・と申しているでござる」

「まさか・・通信内容を聞いてたのか！？」

ドロロの言葉にギロロが先ほどケルルとの会話を聞かれていたのかと思つた。

『いやあ・・あいつが改造したんだ。隊長たちの会話を聞いてなく

てもわかつてゐるんだろうな』

「なるほどな・・乗つ取られても記憶はあつたから核のことも知つてゐるのか・・」

『大将、止めるなら止めた方がいい。』

「あ？」

『核を壊すと言つことは一気にその破壊された衝撃も一緒に受けるということだ。そうすれば疲労しているマジジの命はない』

『つ！？』

ルククの言葉で全員が息を飲む

「マジジっ！止せっ！逃げろお！」

ガルルとギロロが叫ぶが、キルルはこちうに視線をギロロたちに向ける。全員がマジジに逃げろといつ中でマジジは少し微笑んでキルルの中に入つて行つた。

「マジジ・・！」

核（後書き）

マジ・俺、早速死亡フラグかなー?  
ギロ・おま・・・！（俺の苦労を返せっ）

## 黒き光と向かう終焉

ガルルの声はキルルの雄たけびによつて、搔き消された。

だが、それでキルルが早くも止まる訳がなく、こちらに向かつてきた。

「……つマジジが中に入つてゐる間、我輩達はキルルを食い止めであります！中に入ることは許さないつ特に、ギロロとガルル中尉殿つ」

ギロロが顔を歪めた。

「二人の気持ちはわかるであります。しかし、ギロロたちが中に入つてマジジがどんな気持ちをする？そこを考える」

ケロロは銃を転送させ、他の皆と合流しながら銃弾をキルルを飛ばす。

「……ガルル。ケロロの言つ通りかもしけんな……」

「……つわかつてゐる……そんなことはつ」「そうか……先に行つている」

ギロロもケロロと同様合流しに行つた。ガルルもしばらくそこでいたがキルルのほうに振り返り、向かつて行つた。

「クルル、核が壊れるまでの推定時間は？」

『大体十分ぐれえだな。』

「それまで持ちこたえればいいんだな。」

ギロロが呟いた同時に視界の隅に黒い何かが横切つた。

「……？」

「よお……ギロロ。久しづりだな……」

「ノラ……！」

ノラはギロロを通り過ぎると、キルルの頭上に來た。

「ノラ？何をする氣でありますか？左目の包帯取つてゐるけど……」

！」

ケロロがオロオロしながら、頭上にいるノラを見上げている、ノラは左目にしていた包帯を取つてゐる。黒い瞳からは黒い雷が周りに発生していた。

「俺も活躍・・一応はしどかねえとな？」

そういうて腕を上げて、剣を作り出し、それをキルルに突き刺した。ノラから黒い雷が発生し、キルルが雄たけびをあげる。

「ノラつ無茶はやめるでありますつ！」

「こうでもしねえつと・・・つ」

しばらくすると、ノラが左胸を抑え、ふらりと落ちる。ケロロが慌てる中それを夏美がキャッチした。

「夏美殿、ナイスキャッチ！」

「ノラつ大丈夫？」

「ケホッ・・なんとか・・」

「大丈夫じゃないじゃない！血吐いたわよつ！？」

ノラも夏美に言われて手を見ると吐血した痕があった。

「だいじょーぶ・・力を使いすぎただけだ」

「ホントにつ？」

「おう・・

夏美はノラを下ろし、ながら、聞く。

そして、キルルの雄たけびが鳴り、夏美がキルルのほうに視線を向けると、剣は消え、黒い雷がまだキルルに纏つており苦しんでいる。

「な・・なんか・・・ヤバくない？」

ケロロが呟き、全員がそう思ったのか頷く。その瞬間・・

『皆つ逃げろ！…』

ルククの声が通信機からした直後、キルルが光、その光はケロロたちを覆つた。

黒き光と向かつ終焉（後書き）

ケロ・最後の最後のいいところ取りでありますなあ・・・  
ノラ・クツクツク・・俺あ長期戦向きじやねえからな  
ギロ・知つとるわ！；

「・・・そつ・・軍曹・・軍曹つてばー。」

「・・・冬樹殿・・・?」

「よ、よかつたあー」

ケロロが田覓めたとき田の前には冬樹がいた。

「ど・・どうなつて・・?キルルはつ?」

「キルルは消滅した。つてクルルが・・」

「そ、そうでありますなあ・・」

ケロロが安堵しているとまたもやハツとして  
「他の皆は・・!?

ケロロが周りを見渡すと、皆が起き上がりしているところだつた。

「ケロロ・・全員無事だ・・あの爆発があつてよく助かつたな俺ら・・

・・

ケルルがケロロに近づきながら言ひ。ケロロはケルルの言葉が気

になりさらりに周りを見渡すと・・・

「・・・なんじやこりや　!—!」

「るつせえ・・だから、言つたら。爆発したつて。」

「何が!?

「キルルがに決まつてんだろうが」

ケロロが見渡すとそこは更地になつていた。いくらキルルに破壊  
されていたとはいえ、ここまでにはなつていなかつたはずだ。

「まあ・・偽物の町なんだしいいじゃねえの?」

「ま、まあそうでありますが・・」

「しつかし・・よく、無事だつたな・・俺達・・」

ノラは煙草を吸いながら言ひ。即座にそれはケロロに没収され、  
折られた。

「ふつ・・偶然だと思うか?最後の最後でいいところ取りだつたな・

・マジョジョ

「あれー？ バレた？ さつすが、ギーくん」

マジョジョが瓦礫の中から現れた。

「何時の間に・・・」

「いや・・ 実は少し前から起きてたんだよ、大体・・・ そこの人が剣を突き刺す時ぐらいにさー」

「なら言え！」

マジョジョの言葉にハギギがつつこむ、後ろでバイルがハギギを抑えているのは見慣れている光景だ。

「頭が回転しなくてさー・・・って、兄さんは？」

クルルが無言でキルルがいたと思われる場所を指す。ガルルが誰かに向かつて名を読んでいた。

「・・・死んでるの？」

「いや・・ 多分生きてるはずだろうな」

マジョジョはそこに向かう。

「・・・マジョジョか・・」

「久しぶり・・ ガー兄・・」

「マジジなら、この有様だ・・」

「・・・へ？ 子供・・？」

ガルルが抱えているのはケロン人の子供だった。見た目ではタママより上のような気がする。だが、体色といい白衣といい。自分の兄しか思えない。

「ど・・ どうなつて・・？」

ケロロがぼそりと呟き、全員がクルルたちを見る。

「・・・勘だがノラの力のお陰だろうな。ノラが外から衝撃を与えたせいで本来内部爆発で済むところを外で爆発させた。だから、衝撃の負担がマジジにそんなに掛からず体を縮めるという現象でマジジは生き残った

「なるほど・・」

「くつくつくつ・・・これじゃ犯罪者として突き出すわけにはいかねえなあ・・・どうみたって、マジヨジョの兄だとは信じてくれそうにもねえし、キルルも核ごと消滅したし、キルルが破壊活動してくれた偽者の町はその消滅のさいの爆発で更地になつた。証拠はねえ」

「じゃ・・・！」

「まつ重要参考人としては呼び出しあくらうでありますがなあ・・・  
「まあ・・・そんなことよりも！帰りましょうよ！ギロロも帰つてしまし怪我の手当てもしたいねっ」

ケロロの言葉をそんなこととして夏美が片付け、提案した。ケロロがイジケ始めたが全員がそれに賛同し、本物の奥東京市の日向家に帰ることにした。

「いててつー痛えよつー！」

ハギギが足をじたばたさせながら、ブルルの手当てから逃げようとした。しかし、ブルルはしっかりとハギギの腕を掴んでいるので逃げることができない。

「この中であなたが一番重傷なのよつ大人しく手当てを受けなさい！」

「平氣だつてつこれぐらじすぐに治るわー！」

「ギロロくんつ」

「ハギギ。ちゃんと手当てを受けろ」

「うつ・・・うつ・・・」

ギロロに言われ、渋々大人しくなるハギギ。ギロロも比較的他と比べて怪我が少ないので手当てに回つている。

「ケロロ。痛むとこあるか？」

「大丈夫であります・・・次はギロロの番でありますよ？」

「へ・・?い、いや、俺は怪我とこう怪我はしていないから」「よいしょ」

ケロロがギロロの左腕を掴む。ギロロの顔が痛みで歪む。

「ほらあ・・・やつぱり捻つてる・・あん時でしょ？捻つたの

キルルの攻撃を受けた際、ロギギと一緒に落ちてきた時のことだ。

「な・・なんでわかつたんだ・・」

「左腕を使わないように立ち回りをしてたり、庇つていたりしてた

しね

「そ・・・そつか」

まさか、気づかれるとは思つていなかつたのだろう。焦りが見えた

「まつたく・・素直に言いなさいつて

「し、しかし、他の奴らの方が怪我が酷いだろつ。」

「相変わらずギーくんは優しいねー」

マジヨジョもガルル小隊の面々を手当てをしながら言葉を一いち方に向ける。

「優しくなどないと思つが・・」

「そこは自信を持つところでありますよ」

「むう・・・」

「そういうえばあの・・剣をキルルに突き刺してある意味いいところ取り」「テメエが言つなよ!」ハギくん、人の台詞遮らないでよーで、その人どうなつた?「

「ノラならきっといつもの公園の木の上にいると思いますよ~」  
そんな疑問にタママが答えた。ノラは口向家に帰還する際途中で姿を消した。

「あいつは気まぐれでありますから・・」

「とんでもない気まぐれ屋だがな

「まつたくであります・・」

ケロロとギロロの言葉で笑いが口向家から出てきた。

「『めんなさい』。俺のせいで」

その後マジジが目を覚まし、リビングで頭を下げながら言つた。

マジジが代償としてなくなつたのは子供になつたことと左田の消失だつた。

「顔を上げる。マジジ。ギロロから聞いたお前は操られていたとな

「だが・・それでも俺が弱かつたせいで操られたのには変わりはない」

「それに・・俺もお前に謝ることが・・」

「・・・は?」

ガルルのその言葉でマジジが素つ頗狂な声を上げる。ケロロたちがガルルがマジジに誤るようなことを言ったのだろうかと思い思案していると、ロギギとギロロはわかつてているのか遠い目をしていた。

「じ、実はな・・・お前は本来死亡しているんだ・・・」

全体が一斉に静まつたのは言つまでもない。いつの間にかノラも

その話を聞いていた。

「・・・待て。待つてくれ・・・俺は生きているぞ?」

「いやな・・お前、マジョジョの葬儀の夜、白衣を落としていないか?」

「・・・あー・・落としたかも・・それがどうかしたのか?・・・」

先ほどの空氣はどうやらというモノである。

「その白衣が川の近くで発見されてな、その白衣の中からこれが発見された。」

そういうて、ガルルが取り出したのは古い写真だった。

「これって、マジジたちだつたんスね」

ガルル小隊は何度か見かけている写真である。マジジは言葉を出さないものどうしてそれをという顔である。

「うわあ・・懷かしいねえーこれって、ボクのオリジナルと兄さんが撮つた写真じゃん」

「無論、お前を探したさ、だが、見つからなかつた。家にも居なかつたからな・・そうして、お前は居なくなつてしまつた。一ヶ月経つてもお前は見つからず軍や警察はお前が死亡したと決めた。戸籍上の保護者は俺達の両親になつてているのは知つてゐるだろ? 親父達も諦めて、死亡届けを出したんだ」

「まさか・・そんなことがあつたなんて・・」

ガルルの衝撃発言連発でマジジが固まつてゐるのが見てもわかる。

ケロロたちが哀れみの視線を投じている。

「そ、その・・・マジジ、スマン・・・」

「い、いや・・・ガルル達は悪くない・俺が失踪したのが悪いのだからな・しかし・・死亡してることになつていようとは・」

「いつたい、何が合つたんでありますか?」

ケロロの言葉でマジジが眉間に皺が寄る。

「・・・・・マジョジヨの葬儀が終わつて、その・・・きつとガルルたちにひとては間抜けな話だが、川に落ちた・」

「・・・・・はあ!/?#」

「兄さん・・・・・」

「俺も自分で恥ずかしいと思つて・・・・呆然としていて、フリついて、足を滑らせて川に落ちたんだ。おそらく、その時に白衣を落としたんだと思つ」

「思つ? 確認してねえのか?」

「お恥ずかしながら・・・・氣が付いたのが翌日の中だったから・・・・」

『・・・・・』

無言ができた。マジジも自分がそこまで放心状態になるとは思つてもいなく、川に落ちて、白衣を落とし、翌日の中、寒いと思い白衣を寄せようとしたらなくなつていた。無論探したがなかつた。肩を落として家に帰ると電話が鳴つたんだ。

「電話だと?」

「ああ・・でも、変なんだ。相手の声を聞いたら眠くなつて・・・・なんつて言つたかなどこかで聞いた組織名だと思つんだけど・・・・」

その言葉を聞いてロギギが夢のこと思い出した。ケルルにも言つていなかつたギロロの後で会つた話を

「アビリタ・・・」

ロギギが小さく呟いた

**全員無事（後書き）**

ケロ：等々クライマックスでありますなつ！

ギロ：次回作も一応決まつてゐるらしいのですが・・・

ケル：他ジャンルと混合だつけ？え・・と、ぶりーち？つていうんだよな？これ

ギロ：多分な。まあ・・あくまでも予定だしな；

## 最終回 慶しい幸せな日常（前書き）

今回で最終回になります。読んでくれていてる方々ありがとうございます。  
ました。それではどうぞ。

前の話で言っていた次回作については後日できれば発表したいです

## 最終回 慌しい幸せな日常

「そ、そ、そ、そ、それだ！」

「アビリタ……？……あれ？ギロロ……」

「ああ……あいつの所属している組織だな」

「あいつ？」

「あ・・そっかケルルは知らないんですね……小隊メンバーの一人であります」

「……んなのいた？資料で……」

「いねえと思つてたが」

ケロロの言葉でロギギとルククが話し出す。以前の戦いの際ケロロ小隊の資料は集めた。だが、ケロロたち以外にケロロ小隊がいるとは知らない。

「まあ……一応非公開情報であります。彼女は色々兼業してるのでありますし……」

今回の、前回の事件とも関わりを持たなかつたが、詰問されるのは必須だらうと、ケロロは思う。

「まあ……職務に結構忠実でありますから、いなくて好都合でありますがね……」

ケロロ小隊が没面顔になり、ケルルたちがそれでいいのかという表情をしている。そこでギロロがボソッと

「あいつは頭が固すぎる」

「それ、先輩が言いますか」

「クルルに同感」

「う、うるさいつ」

そして、カガガがマジジに続きを促せる

「まあ……ロギギの言つ通りでアビリタ。つて相手は言つていた。その後のことは記憶にはほとんどないのが現状だよ……」

「そのときだなマジジが操られたのは……」

「そうだな」

「あ～もうつ暗い話は終わりでありますつマジコジョたちが事情聴取から帰ってきてから考えるでありますよー」

「・・・ケロロらしいな・・あ、ギロロ、今度、テメヒいきなり団子、奢れよ？」

「いきなり団子をか？構わんが・・」

「よしつ決定つ」

その夜は宴のどんちゃん騒ぎで田向家は笑いに溢れていた。その途中、バイルはギロロに呼ばれた

「何？兄貴・・」

「お前の過去はケロロたちから聞いた」

「つ・・・ティオラが性能がいい・・だから、博士も他の連中も皆、あいつばっか構うようになった・・あいつが来ると俺の居場所が無くなる」

そのバイルの台詞の途中でギロロはバイルの頭に手を置いた。

「・・・兄貴・・？」

「俺には関係ないな。俺はバイルと言う一人の者として認めているし、仲間だと思う。それにここにいる奴は皆、お前の居場所を奪わん・・ティオラもだ。」

「・・・つ／／／兄貴・・かつけえ／／／」

「え？何か言ったか？」

「なんもねえよ／／（俺、一生この人に着いて行こう・・）」

「バ、バイルくん・・」

「あ？」

「その・・・」めんねつ追い掛け回して

「なんだ・・今更じやねえか」

「うつ（グサツ）」

「・・・兄貴がいるし、いい。」

「バ、バイルくん・・・」

バイルの言葉でティオラの表情が明るくなり、それを見ていた保

護者の立場にある、ケロロとギロロが静かに微笑みながら見守っていた。まあその後クルルによつて邪魔されたが

「あ、後・・・ティオラ・・・テメエ俺のことなんて呼んでやがる」

「へ? バイルくん・・・「俺は女だ」・・・へ?」

バイルの発言により辺りは一気に静まつた。だが、マジジたちは暢気に酒を飲み、マジョジョもギロロと会話しており、ハギギはそのマジョジョをギロロから離しており、カガガは暢気にその光景を見ていた。

『え・・?ええええ! ?』

「るつせえ・・」

「なんだ・・お前ら知らなかつたのか? ケロロたちはともかく、ティオラは知つとけよ。姉弟なんだしつ」

「だ、だつて・・ずっと、男の子だと思つてたから・・」

「誰が、いつ、俺が男だつて言つたんだよ」

「だつて、いつもジャージだし、口調は男の子だしつ!」

「設定した博士に言えよつ!」

姉弟が騒ぎ始めた。それを皆は驚愕していただがすぐに微笑ましく見守つた

翌日ギロロにとっては衝撃がまつてゐるとは知らずに・・・(笑)

翌日、宇宙警察がマジョジョたちを重要参考人として、連れて行くための迎えが来ていた。マジジの左目には義眼が入つている。

「・・・なんだ? マジョジョ・・・そんなに俺を見てもなんもならんぞ? :」

マジョジョがギロロのことを凝視していた。

「ギーくん・・ボクはマジョジョのクローンだ。」

「・・?あ、ああ。どうした?」

その事実は全員が知つてゐる。だが、マジョジョは止まらず言い続ける。

「でも、ここにいるのはボクだ。ギーくん、言つたよね？ボクはボクだつて」

「あ、ああ・・・？」

「ならさ・・・ボクが想つてこりの、気持ちも嘘じやないよね？／＼」

「当然だ。お前が思つている事はお前の気持ちだろ？／＼」

「人が会話している中、ケロロたちが何かに気づいたのか、騒ぎ始めて力ガガに止められていた。

「（？何をしとるんだ・・・？；）」

「じゃ・・せ・・その想いを告げるのも、ボクの勝手だよね？」

「ああ。当然だろ？？」

ギロロの顔は何を当然といつ顔をしている。マジヨジョは一度無言になつた。

そして、急に顔を上げ、ギロロを引っ張つた

「うお！？」

その瞬間、ギロロの脣にマジヨジョの唇があたつた。

そして、離れた

「ギーくん、ボクは君のことが好きですっ従妹とか関係なく。一人の女としてキミが好きです／＼／＼

「・・・。」

ギロロの瞳然。

「勿論、負けるつもりはさらさらないよ！」

マジヨジョは夏美を一瞥し、ケロロたちを見やる。ケロロたちは石化していた。

「さつさと、マスターから離れるー！クソ魔女！／＼／＼

「わー・・ハギくん、顔真っ赤

「るつせえ！#さつさと行けよ！#」

ハギギが怒鳴りながら、未だに近かつたマジヨジョとギロロを離した。

「じゃ！事情聴取行ってくるねー」

そういうて、マジジとマジョジョは行つてしまい、呆然としていたギロロは・・

「ギ・・ギロロ・・・？」

「な・・な・・なあ！？／＼／＼

ギロロの叫びが木靈したのは言つまでもなく、その後ろでさつすが・・鈍感王・・・言われるまで氣づかねえか

「先・・越されたであります——！」

「マジヨジョ殿なら安心でござる」「わひびく

「そうですねえ～」

各自の感想を言つていた。カガガはさうにその後ろで

「おお。やつと告つたか（笑）」

「なあ！？お前知つていたのか！？」

「あ？氣づかねえ方がおかしいだろ」

ガルルの言葉をしれつと返すカガガ。

その後はてんやわんや、騒然としたのには変わりはなかつた。

戦場の赤い悪魔は仲間を護るために居場所から離れる。しかし、結局は彼の居場所はここだけしかないとということだった。新たな仲間まで連れ。戻ってきた赤い悪魔は平和に時を流すのだった・・・  
「アビリタ・・か・・何が・・目的だ？」  
「さあな・・だが、今回のことと何か関連はあるだろうな・・・」  
騒いでいる後方でケルルとカガガが呟いているのはケルルの傍に居た、ロギギしか知らないのだった。

## 最終回 蒼して幸せな日々（後編）

ケロ・セーの

全員・拝読ありがとうございましたー！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4685v/>

超劇場版ケロロ軍曹 魔女と戦場の赤い悪魔との約束

2011年8月25日03時27分発行